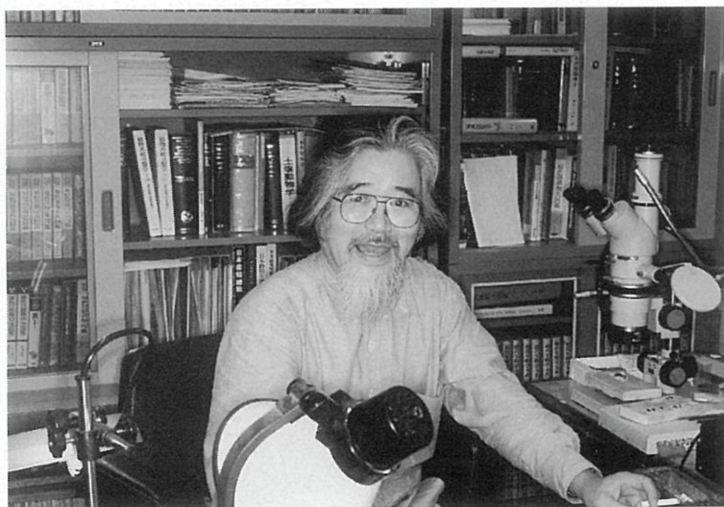


甲虫ニュース

No. 138
June 2002

COLEOPTERISTS' NEWS



笠原須磨生さん (1935-2001)
(1993年7月 興水太仲氏撮影)

笠原須磨生さん追悼号

Memorial Issue to Mr. Sumao KASHARA

追悼記事目次

- 笠原須磨生さんの逝去を悼む 上野俊一——2
 笠原須磨生さんとカサハラゴミムシヒサシダニ 黒佐和義——4
 笠原須磨生さんを偲んで 渡辺泰明——4
 酒仙の甲虫屋——お酒と編集の日々 藤田 宏——5
 鮫鯨鍋 新里達也——5
 笠原須磨生氏の思い出 平野幸彦——6
 画, そうして木曾谷での採集の頃 松井幸一——7
 ゴミムシの先生, 笠原さん 山地 治——8
 出相い 興水太仲——8
 熊のような“笠原さん” 堀 繁久——9
 「ヒゲの時代」 西川正明——9
 酒の友, 虫の友, 笠原須磨生氏 蕭 嘉廣——10
 笠原画伯の思い出 境野広行——10
 スピルバーグの映画と笠原さんの長電話 松本俊信——11
 最後の手紙 大谷規夫——11
 笠原さんが遺されたもの 野村周平——12

笠原須磨生さんの逝去を悼む

上野俊一

初めて笠原さんにお会いしたのがいつだったのか、今では記憶がぼんやりしています。はっきり思わせるのは、甲虫談話会の世話人の一人として、1982(昭和57)年に甲虫ニュースの編集を手伝われることになったときからで、その後は、亡くなった黒澤良彦先生の研究室で顔を合わせる機会も多くありましたし、それ以前から興味をもっておられたゴミムシ類の研究についてのご相談を受けることも増えました。その翌々年には、かねてわたし自身が同定したままになっていたケブカゴミムシ類の2種に関する記録を、わたしの勧めに従って英文の報文にまとめられました。これが最初のものになりました。その後のご活躍ぶりは、学会員の皆様がよくご存知のとおりです。

笠原さんは、1935(昭和10)年7月10日に、神戸市湊東区(現在の兵庫区と中央区の一部)でお生まれになりました。4歳のころ東京の現豊島区南長崎に転居され、目白小学校から豊島区立高田中学校に進まれましたが、都立豊島高等学校在学中に結核を発病され、やむなく山梨県大月市の橋倉鉦泉で、農家の二階を借りて療養生活を送られることになりました。このころから、もともとのお好きだった絵、おもに風景画を描かれるようになり、描きためた油絵や水彩画をまとめて、1962(昭和37)年に銀座の兜屋画廊で個展を開いておられます。いっぽう、転地療養で病気が完治したのち、1960(昭和35)年、25歳のころ、親しい友人とともに挿し絵、細密画の分野に進もうと志され、ワークブックやイラストなどの仕事を受注して生計を立てられるようになりました。1964(昭和39)年7月12日、長谷川秀子さんとご結婚、それ以後、亡くなるまで、船橋市西船のお宅に仲睦まじくお暮らしでした。

最初にもちょっと触れましたように、日本鞘翅学会に対する笠原さんの直接のご貢献は、1982年に始まります。1989(昭和64)年の合併改組ののちは、新学会の常任幹事としてさまざまな面で活躍され、1998(平成10)年まで、会の発展に大きく貢献されました。学会の機関誌であるELYTRAの表紙

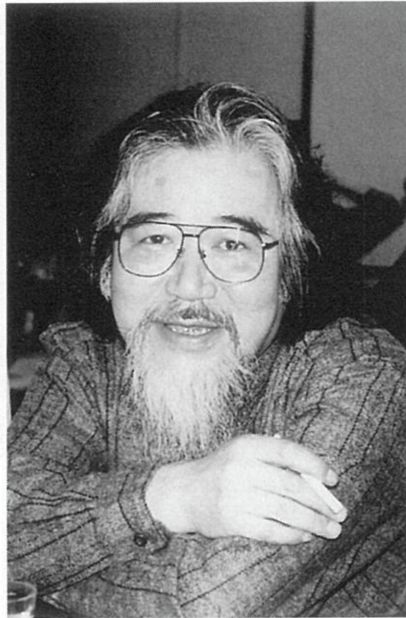
も笠原さんがデザインされたもので、現在までそのまま継承されています。ご発表になった英文の原著論文も50篇に近く、とくにナガゴミムシ類に関する業績は、余人の追隨を許さぬものがあります。そのほかにも多くの著作を遺されましたが、ご本業の絵を中心とする幼少年向けの出版物は、とてもわたしたちには拾いきれませんので、当初に予定していた著作目録をつけるという案は、残念ながら諦めざるをえませんでした。その代わりに、甲虫学関係の

おもな著作のみを集めた目録を、ELYTRA第30巻第2号の冒頭に掲載する予定です。なお、笠原さんの収集されたご標本は、その全部をいったん国立科学博物館に引き取りました。かなり徴びているものや一部に虫害を受けたものもあり、すべての整理がつくまでには相当な時間を要することと思われすが、基準標本だけはできるだけ早く検討を終えて、研究に役立つようにしたいと考えています。

笠原さんは1990(平成2)年ごろから健康を害され、病院通いが続くようになりました。最初は軽いめまいでしたが、1997(平成9)年にパーキンソン病と診断され、ふたたび療養生活を強いられることになりました。その裏に過剰な飲酒の影響があったことは一部の友人のよく知るところで、なんんもの本職の医師が禁酒を勧め、わた

したちも酒席に連なりそうな会合には決して笠原さんを誘わぬようずいぶん気を使いました。しかし、2000(平成12)年10月には中咽頭癌が発見され、その放射線治療を続けておられた翌2001年3月には新たに胃癌が見つかって、胃の摘出手術が必要になりました。さらに手術の直後に咽頭癌の再発が確かめられて、奥様の献身的な看護の甲斐もなく、同年9月29日に、虫仲間のだれにも知られぬまま、淋しくお亡くなりになりました。享年66歳でした。

これまで書いてきたことからもお判りのように、笠原さんの学歴は高校中退で、その後あらためて就学されることはありませんでした。わたし自身はこの事情をよく知りませんでしたが、亡くなったのちに奥様からうかがったところでは、細密画も外国語も昆虫の分類も、すべて独学で勉強されたもの



日本鞘翅学会大会懇親会にて。
1993年11月21日(久保田正秀氏撮影)

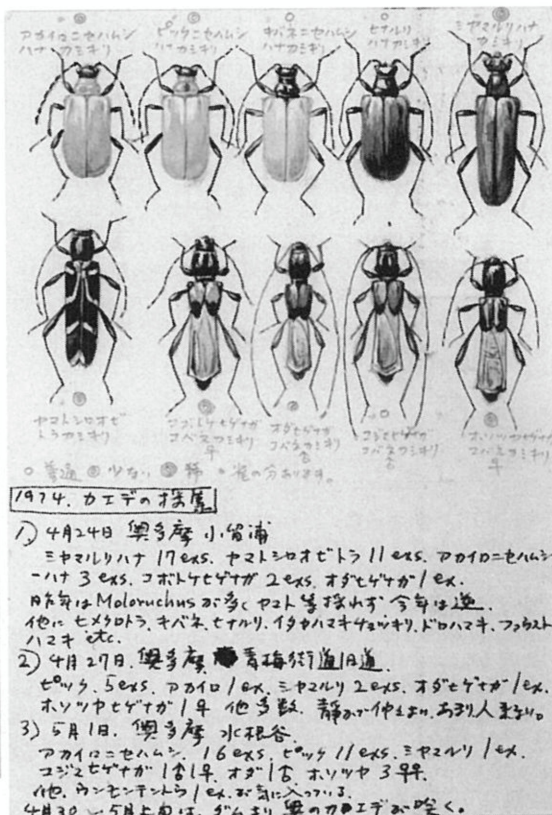
だということです。たしかに、初期に持ちこまれたご論文の原稿は、一から十までわたしが書き直したほうが早いと思えるほど、体をなさないものでしたが、お教えしたことを着実に身に付けられ、最後のころには、手を加える必要がほとんど認められないほど腕をあげておられました。順当に大学まで卒業しても、外国語を使いこなせる人はそう多くないように思いますが、ラジオの英語講座やフランス語講座で勉強して、笠原さんほど言葉の上達された例を、わたしはほかに知りません。笠原さんがいかに努力家だったかということは、この一事をもってよくわかりますが、そのうえに描画の必要上、昆虫

形態学をよく勉強され、さまざまな難関を克服して多くの業績を遺されたのですから、その精励ぶりにはまったく頭が下がります。分類学のような、努力の積み重ねを必要とする学問分野で、66歳という年齢はいかにも若すぎます。せめてあと10年ぐらいいはお元気で、蓄積された貴重な知見をあとの人たちに伝え遺して欲しかったと思うのは、わたしだけでは不いでしょう。今は高岳院観樂日須居士となられた笠原さんのご冥福を心からお祈りして、進めペンをおきます。

(国立科学博物館)



「四匹の蟲の会」の向井良成氏に宛てられた私信。1965年7月。



1974. カエデの採集

- 1) 4月24日 奥多摩 小留浦
 シヤマルリハナ 17 exs. カミシロオビト 11 exs. アカイロニセハムシ 11 exs. コホトケツギ 2 exs. オダケツギ 1 ex.
 昨年は Molarruchus など 採集せず 今年も採集せず。
 他に ヒメクワガタ、キバネ、ヒメクワガタ、イトハハツキ、ドロボロ、フクロハツキ etc.
- 2) 4月27日 奥多摩 青梅街道 11 日道。
 シヤマルリハナ 5 exs. アカイロ 1 ex. シヤマルリ 2 exs. オダケツギ 1 ex.
 ホソツツキ 1 ex 他多数。静か川中上流。両列人まき。
- 3) 5月1日 奥多摩 水根谷。
 アカイロニセハムシ 16 exs. シヤマルリ 11 exs. シヤマルリ 1 ex.
 コジロツツキ 1 番 1 号。オダケツギ 3 号。
 他に、ウツクシツツキ 1 ex. など。入山。
 4月30日 - 5月上旬は、オダケツギ 採集の期間が空く。

向井氏に宛てられた、採集品の報告。きれいに色づけされている。中央に「雀の分あります」と書かれているが、雀とは向井氏の愛称。

笠原須磨生さんとカサハラゴミムシヒサシダニ

黒佐和義

1966年に小学館から刊行された原色昆虫図鑑の共著者の一人として、私は甲虫目の一部を担当した。その関係で懇意になった同社の図鑑担当の某氏から「市川市のある病院で療養中の患者さんにゴミムシの好きな若い人がいて、時々病院を抜け出しては熱心に採集しているそうだ」と聞いたが、その時は気にもとめなかった。その青年が笠原さんであることを知ったのはずっと後になってのことである。

70年代の終りごろ、笠原さんはゴミムシ類の研究者としてめざましい活動を開始された。*Elytra* 誌や甲虫ニュースに次々と発表される新種の記載や日本未記録種の報告など、たいいてい見事な全形図を伴っていて、甲虫のうちでもとりわけゴミムシに関心のある私は強く魅了され、次は何か出るかなと心待ちにするようになった。私の倅のごときは、笠原さんが何か新種を発表されるたびに、そのゴミムシを求めて type locality に出かけることが、何度もあった。とにかく、笠原さんが日本産歩行虫、特にナガゴミムシ類の分類学的研究に大きな貢献をされたことはどなたも異論はあるまい。なお、上野俊一博士により発表されたチビゴミムシに関するおびただしい数の論文に付せられている全形図も大多数は笠原さんの描かれたものと聞くと、チビゴミムシの

近縁種間における外部形態の微妙な差を巧みに描きわけている精緻な図には全く感嘆の他ない。

笠原さんとは昆虫以外のことを話題にした記憶があまりないが、神戸の須磨で生まれたのが自分の名のゆえんだと話されたことがある。私も4才頃から大学を卒業するまで神戸に住み、須磨区内で現在、絶滅危惧種(1類)とされているマダラシマゲンゴロウとマルコガタノゲンゴロウのほか、チャイロマメゲンゴロウ、スジマダラチビコメツキなどの珍しい甲虫を採集したこともあって、思い出の深いところなので、いろいろお尋ねしたが、幼時に他の土地へ移ったので記憶がないということだった。

私は昆虫に付着しているダニの分類学的研究に永年励んでいるが、特に歩行虫についているものに力をいれている。タンゴヒラタゴミムシに固有のダニに2未記載種があり、材料が当初やや不足していたので、笠原さんにこのゴミムシの余分の標本があったら貸してもらえないかとお願いしたことがある。彼は自由に使ってくれと多数の標本を提供してくれた。私はそのダニの一方の種の種小名を *kasaharai* (和名:カサハラゴミムシヒサシダニ) とすることに決め、そのむね彼にも伝えてあったが、私の怠慢で約束を果たさぬうちに、亡くなられてしまった。笠原さんにはもっと長く生きて、研究を続けて頂きたかった。これが寿命というものなのだろうが、悲しい。心からご冥福をお祈りする次第である。

(東京都豊島区)

笠原須磨生さんを偲んで

渡辺泰明

私が笠原須磨生さんと親しくご交誼を重ねるようになったのは甲虫談話会の活動を通してで、特に甲虫ニュースの編集世話人をお願いしたことが、これに一層の拍車がかかった。心良く編集世話人を引き受けられた笠原さんは、その後甲虫ニュースの編集会議のたびごとに、当時は世田谷にあった東京農大の昆虫学研究室を来訪されて、もう一人の編集世話人である岡島秀治博士と掲載原稿の調整に当たられた。そして、それが終わった後は直らでもするかのように研究室の学生達と酒を飲み交わし、夜遅くまで虫談に花を咲かせるのが習慣の様になっていった。このため、研究室の学生達は編集会議で笠原さんが来訪されるのを心待ちする様になったが、笠原さんもこの機会を十分に楽しんでいる様子だった。この様にして、笠原さんは甲虫談話会と日本鞘翅目学会とが合併する前年の1988年まで甲虫ニュースの編集に携わり、ご自宅に近い西船橋駅から東京農大最寄りの駅である小田急線の経堂まで、ほぼ7年間もの長い間通われた。このお陰で、私の多忙なために一時遅滞を生じた甲虫ニュースの発行が順調になったばかりでなく、内容的にも一層充実した紙面構成が図られたことは、甲虫ニュース100号記念号

に記した様に笠原さんの献身的な努力に因る所が大きい。

この笠原さんが亡くなったことを知ったのは、昨年11月14日に東京農大厚木キャンパスで鞘翅学会第14回大会が開催された時だった。この折、上野俊一博士から笠原さんがすでに1ヶ月半も前の9月29日に亡くなられたとのことを伺った時には、あまりの突然の訃報に言葉を失った。思えば笠原さんと最後にお会いしたのは、奇しくも鞘翅学会大会の折で、1998年11月に愛媛大学で第11回大会が開催された時だった。健康状態が極端に悪く、大変な無理をされて大会に参加された笠原さんの体調を周囲の人達は非常に心配されていた。そして、懇親会の席では笠原さんにアルコール飲料を飲ませない様配慮することにし、私も笠原さんの酒のコップを烏龍茶のコップに差し替えたりした。このことが無類の酒好きだった笠原さんの怒りをかった様で、私が2000年6月に入院中の病院から「晴れて酒が飲める様に、お互い一日も早く病気の治癒に努める様に…」と書いた手紙の返信は遂に受け取ることができなかった。以来、これらのことが長い間私の頭の中にあっただので、一度は元気な笠原さんとお会いしたいものと思っていたのに、今となってはかなわぬ望みになってしまった。こんなことなら愛媛大学での鞘翅学会大会の懇親会場で、存分にお酒を楽しんで頂く様に取り計らえば良かったと悔やまれてなら

ない。しかし、私のそんな思いはともかく笠原さんは今は天上の人となって、先に逝った馬場金太郎、黒澤良彦両博士を始めとする「虫きち」の人達と虫談に浸りながら、こよなく愛した酒を酌み交わして

いる様な気がしてならない。心からのご冥福を祈り上げる。

(東京都町田市)

酒仙の甲虫屋——お酒と編集の日々

藤田 宏

笠原須磨生さんと初めてお会いしたのは、今から30年ほど前の1973年7月、北海道知床半島・羅臼岳の麓にある町営の「ラウス荘」だった。当時の私は20才を過ぎたばかりのバリバリのカミキリ屋で、この年は返還後まもない小笠原諸島で新種を採ったり、伊豆諸島の御蔵島で久々のハネナシチビカミキリを採ったり、この北海道でも、10数年ぶりのキョクトウトラや初めてのアイヌホソコバネツなどのカミキリを採り、自分で言うのもおかしいが大活躍の年だった。

「ラウス荘」の食堂で夕食の際に、お互いに甲虫をやっていることがわかり、すぐに打ちとけて虫談となった。笠原さんとキョクトウトラの話をした記憶はないので、採ったのはその翌日だったのだろう。

その後、東京へもどって、甲虫談話会の会合でたびたび顔を合わせるようになり、急速に親しくなっていた。笠原さんはゴミムシ屋、私はカミキリとクワガタ屋で興味の虫の分野は異なり、年も親子ほど離れていたが、笠原さんと私には大きな共通点があった。

1つは、お互いに虫に関する本作りが大好きだったことで、虫と同等か、もしかしたらそれ以上に、虫の本を作ることに関心があったことである。笠原さんは「甲虫ニュース」を編集しておられたし、私もいろいろな雑誌を作っていたので、話題が合うことは当然だった。2人とも「本作りのムシ」でもあった訳である。

もう1つはお酒で、笠原さんと虫の会合などでお会いして、そのまま帰るといことは、まずなかった。とにかく一杯、ということで虫談義が始まり、「虫の雑誌はどうあるべきか？」などという話題になると、熱い議論が尽きることはなく、その結果は

2人共二日酔いということになった。御徒町にある私の自宅へ、若手の虫屋達と共に飲んでたびたび泊まれ、朝起こしにきた私のお袋が、ベットの中からヒゲもじゃのおヤジが出てきて仰天したこともあった。若手虫屋の無茶な飲み歩きに付き合ったとばかりで、一度交番でお説教をくらったこともあった。1人だけ年上だった笠原さんは警官に責任者と思われ、「あんたみたいないい大人が付いて」と怒られていた。あの騒動の元は私だったの…。

そういえば、もう1つ共通点があった。プロの笠原さんとはもちろん比べものにならないが、絵が好きということでも話が合い（私は一時、家業を継ごうとして着物の絵を書いていた）、故・関口俊雄画伯を紹介していただいて、何度か「月刊むし」の表紙に使わせていただいたこともあった。

その関口画伯も笠原さんも、今は故人となってしまった。あれだけ甲虫界に友人・知人の多かった方なのに、亡くなられた時のことを知る人はほとんどいない。残された者は、もう氏の胸中を想像することしかできないが、残念なことである。



ミヤママタタビ

最後に、笠原さんが「月刊むし」172号（1985年）の「今月のむし」の文に添えられたミヤママタタビの花の絵を載せて、お別れの花としたい。ご冥福を心からお祈りいたします。

(東京都台東区)

鯨鯨鍋

新里 達也

笠原さんとはよく酒を飲んだ。昆虫関連の例会の帰りに、必ずといってよいほど、一緒にさせていただき、縄のれんで焼酎の杯を重ねた。懇親会・忘年会のような酒宴では、その二次会、果ては三次会まで、お付き合いさせていただくのが常であった。

笠原さんは、元来とてもシャイな方である。しかし、無類の話好きであるし、その自由奔放な人生を裏付けるように、多趣味で話題も実に豊富である。

酔いが回るほどに饒舌になり、ご専門の絵やゴミムシの話に始まり、旅先で出会った美味銘酒、ときには昨今の虫屋資質に対する批判も飛び出すこともあった。笠原さんとお酒をご一緒するのが、私には何より楽しみなひとときであった。

15年以上前になるが、当時よく通っていた店に、御徒町の「銀月」という居酒屋がある。料理は三流、酒は大手醸造元のお決まり銘柄と、なんら魅力ない店ではあったが、騒いでも怒られないうえに、朝までやっていただけ、虫屋仲間が鼻唄にしていた。その日は、上野甲虫サロンの流れであったかどうか今となっては記憶も定かではないが、その銀月で飲

み続け、一人潰れ、また一人・二人帰るうちに、笠原さん、藤田宏さんと私の3人で、とうとう夜が明けてしまった。酔眼赤ら顔の3人はそのまま不忍池方面に彷徨し、そろそろ店仕舞い支度をしていて、終夜営業の気の弱そうなおでん屋のオヤジを締め上げ、そのまま昼近くまで強引に飲み続けた。まことにむちゃで元気な頃ではあったが、思えばすでにそのとき、笠原さんは現在の私よりはるかに年配であった。

笠原さんと飲むときは、いつも割カンである。そこがとても気疲れしなくてよいところであった。ただ確か1回だけ、奢っていただいたことがある。

地方自治体の出版物の仕事で、昆虫のイラストを笠原さんをお願いしたことがあった。その仕事の打ち上げで、中野の「酒蔵・力」と言う、これも虫屋御用達の店で、西山明君と3人で飲んだときである。そこは大衆酒場であるけれど、魚がなかなか安く美味い店である。まずは刺し盛りから始めて、正月明けの寒い時分であったから、メインには鮫鱈鍋を注文した。同席の西山君も笠原さんとは親交が深く、この3人はいろいろな場面にそろって出没することが多い。当然話は弾むに決まっている。

「昆虫採集を、あまり公然と正当化主張するのは、好きじゃないね」むろん昆虫採集が悪いということではない。採集行為の権利を主張するあまり、社会道徳的規範を逸脱してはいけないと言う、これは笠原さんの言葉である。「僕はね、採集は地元の人とか地権者に、「虫を採らせていただいています」と言うくらいが塩梅いいと思うね」

ある保護関係の筋が「虫を採るな」と、昆虫採集を社会悪として刷り込もうと画策、あるいは直接恫喝してくるから、そのアンチテーゼで「採って何が

悪い」と開き直る、その姿勢に対する笠原さん流の説法である。私は、この言葉は昆虫採集の本質を突いているし、とても気に入っている。

昆虫の研究や趣味は、自然保護と本来相反するわけがない。よく攻撃的となる「乱獲」は、当の虫屋側からみても、変質狂的であり、また通常は一過性の行為である(この限りでは犯罪的行為である)。この程度の善悪は、情報さえ提示されれば、誰にでも判断がつく。笠原さんと言うナチュラルリストは、おそらくそのような核心を体験的に深く理解され、歩まれてこられたのであろう。自然の許容範囲のなかで、無理な主張をせず、ありのままに虫と親しむ、と言う。

焼酎のボトルが1本開いた。西山君と私はまだちょっと飲み足りない気分であったが、笠原さんはすでにだいぶ酔っておられた。そこで、鍋も十分に堪能したし、この場合は雑炊で締めようということになった。小器用な西山君がご飯や卵を調理して、ほどなくホカホカの雑炊ができ上がった。私たちは、汗をかきつつ、わさわさと雑炊を喰って、鍋はすっかり空になった。

昨年秋、笠原須磨生さんが亡くなられたことを知ったときに、私は震え、心底から氷ついた。ご病気が思わしくないことは知っていたが、またきとお酒を楽しく一緒に飲める宵が来ると信じていた。

あの日、雑炊を食べ終えた笠原さんが、満足顔の、そしてしみじみと溜息交じりで、「あー、うまかった!」と語られた場面を思い出す。笠原さんの生涯も、あのときの至福の鮫鱈鍋のように、すこぶる美味い人生ではなかったですか?

(東京都国分寺市)

笠原須磨生氏の思い出

平野 幸彦

笠原須磨生氏が帰らぬ人となった。以前から種々の病に侵され、入退院を繰り返されていた。電話を掛けると元気な声が返ってくるので、何か騙されていたように思えてならない。常日頃思うのだが、自分より歳をとっている人が死んだ場合はそれほどではないが、自分より若い人が亡くなった時は悲しみが大きい。人類は年齢の順に死んでくれればと思っている。しかし、人の運命はままたらぬもので、これから活躍してもらいたい人が、この世から去り、どうでもよい人が長生きしている。誠に不公平というか、それが定めなのか。

笠原須磨生氏と初めて会ったのは確か、我が家で開催した「オサムシとカミキリを語らぬ会」だったと思う。1975年の秋だった。当時はオサムシとカミキリの全盛時代だったか良くわからないが、オサムシとカミキリが苦手の私が勝手に名付けた会である。この時、集まったのは穂積俊文氏、故石田正明

氏ら8名だったと記憶している。3回ぐらい開催したようで、今は亡き中根猛彦先生や久保田政雄先生もいらしたことを憶えている。笠原氏は毎回出席した。まだヒゲをたくわえておらず、若くて元気そのもので、独特の笑い声が今でも印象に残っている。やがて、彼は絵描きであることを知ったが、そんな雰囲気は全くなく、ヒゲを生やすようになったのは画家らしく装うための手段だったのかもしれない。何かの折りに年齢の話になり、私より1つ若いことも知った。ある日、彼から連絡があって、「土生先生を紹介してほしい」と云う。当時、私は西ヶ原にあった農業技術研究所の土生先生の所へお邪魔してはゴミムシ類を同定してもらっていた。そのことを知っていた彼だが、土生先生の所へ一緒に行ってお願してくれという。意外と礼儀をわきまえた紳士で、私も丁重に紹介したことを憶えている。その際に、多くの別刷をいただいたのは今でも役立っている。その後、彼は農技研へ何回か通ったらしい。私が身延山で採集したゴミムシが、ヒラノアカヒラタゴミムシ *Yukihikous minobusanus* HABU, 1978 の名で新属新種として記載されたが、笠原氏はこれを

採りに身延山に出かけ、その時採ったゴミムシが *Trichotichnus kasaharai* HABU, 1981 と命名された。彼の名前のつく甲虫はいくつあるか知らないが、このカサハラツヤゴモクムシが最初のものである。

彼は神奈川昆虫談話会にもよく出席したし、二次会は必ずで、場合によっては三次会に及んだこともしばしばである。神奈川虫報には1978年の「酒匂川、松田付近の歩行虫類」の報告が最初で、その後、見事な細密画と共に、多くの報文を書いていた。

画、そして木曽谷での採集の頃

松井 幸一

最初の出会いは、学生版牧野植物図鑑巻頭の植物の体制図であった。30年以上も前のこと、中学生であった私は、僅かな線と点だけで描かれた単純な花の図に、洗練された職人技がもたらす気品のようなものを感じ、甚く感動した。すでに大図鑑で知って、見事なおサムシの雄交尾器の作図者として記憶していた格調高いお名前を、さらに強く印象付けられることになった。

ゴミムシの分類について講演されたのは、20年近く後のことなので、総会等でお見受けしていた「仙人のような風貌の先生」と笠原さんが一致するまでにも、ずいぶんと年月を要したことになる。

木曽での採集は93年の総会の折、氏が提案され、翌年6月4日小谷の雨飾荘での採集会の際、私がお誘いした。小谷がオオハンミョウモドキの産地であることから、一人一話の時、氏がヨーロッパの *Elaphrus* 属についてスラスラと話されたのは強烈な印象で、今でもその情景が鮮明に思い出される。

その年の9月21～24日に1度目の採集が実現した。いつしか話が二人で木曽谷の歩行虫をまとめる計画に発展したので、私が正直に、ゴミムシの採り方さえ知らず、小谷で松むしの仲間から習ったばかりだと言ったが、少しも気にとめる様子はなかった。道具を拝見した時、笠原さんの手楯（特注の手作り）は、両側が磨り減ってツルハシのようになっていたのには驚いた。

山深い木曽の風土と地酒「杉の森」に惹かれたふうでもあったが、2年間で都合4回木曽に来てくれた。妻籠の旅籠「近江屋」はお気に入りです、2回泊まった。

宿では、甲虫界や画の製作に関わる話を夜中の2時、3時までしてくれた。全てに博識であったうえ、ヒゲを伸ばしたきっかけが、アオバアリガタハネカクシにあること、全形図を描くとき虫の触角を前方に広げるのは、関口画伯（本誌 No. 110）のスタイルを継承したため…等々興味深い話題が豊富で、飽

神奈川県産の甲虫が3,000種に達した時、皆がお祝い会を開いてくれたが、その時、笠原画伯が描いたハムシの水彩画をいただいた。カサハラハムシではないが、ルイスクビナガハムシ、キボシルリハムシ、ムツキボシハムシの3種で、見事に彩色され、素晴らしいの一語に尽きる。数年間、部屋に飾っていたが、色が褪せるとまづいと思ひ、今は紙包みにし、私の宝物として大事に保管している。将来、何らかの形でこの絵を活用したいと考えている。

笠原須磨生氏のご冥福をお祈りする。

(神奈川県小田原市)



1996年7月13日しらび峠にて。(吉沢尚広氏撮影)

きることはなかった。また、いくら酔っても虫屋の批判のようなことはなさらず、反対に、心から尊敬されていた上野先生の偉大さを語られた。私が知らずに「専門家の中では、上野先生の全形図が抜群だ。」と言うと、一瞬困ったような顔をされ、すぐにニヤリとして「あれは、僕が描いているんだよ。」と言われたことがあった。

半ば病床にありながら、膨大な資料を猛スピードでまとめ上げ、採集の結果を2回に分けて研究誌に掲載してくださった。

00年9月の電話では、「僕もあと数年生きられますよ。」「来年は、木曽へ行けそうです。」などと1時間近く元気に話された。しかし、翌春の電話では、苦しそうで声を出すのもままならない様子だった。私は返す言葉を失い、ただ、「早く良くなって奥様と一緒に木曽に遊びに来てください。」と繰り返すばかりであった。

困ったことがある。一昨年亡くなった父の時がそうであるように私の気持ちの中で、笠原さんは未だ亡くなっていない。身近な人の死という事実を認められないのである。奥様を通じれば話もできそうだから、御本人には悪いけれど、私の記憶の中でだけは、まだまだ生きてもらおうことになりそうだ。

(長野県木曽福島町)

ゴミムシの先生、笠原さん

山地 治

私が笠原さんに初めて手紙を差し上げたのは1989年のこと。正体不明のゴミムシを虫友から譲り受け、てっきり新種だと早合点した私は専門家にってもらえるよう東京の知り合いのNさんをお願いした。Nさんはゴミムシの同定をお願いするのだったら、笠原さんがよいのでは、ということで紹介していただき、標本と手紙をお送りした。しばらくして標本と一緒に送られてきた手紙には *Parabrosicus crassipapis* (BATES) フトクチヒゲヒラタゴミムシと書かれていて、私の新種のゴミムシの夢は打ち砕かれたのであった。たしかに図鑑を見ると同じゴミムシが載っていて、どうして分からなかったのかと悔やんだのだが、当時は、採るゴミムシ、特にナガゴミムシ類などどれもこれも同じに見えていたのだからしかたがない。

それから、私が不明のゴミムシを送り、しばらくして返事を頂く、という文通みたいな関係が何年も続いた。

初めて直接お会いできたのは、1994年9月のことである。ようやく岡山のナガゴミの産地を見ていただける、と喜んで山乗山と苗代谷川にご案内した。岡山にはこんないいところがあるんだね、と言われたが、いいえ、ほとんどここらだけなんですと答えた。このときが笠原さんにお会いできた最初で最後である。この時の採集品は、ケブカヒラタゴミムシ岡山県亜種の記載文に paratypes として使わ



1994年9月11日、岡山県川上村苗代谷川の源流部。

れ、「Elytra」の一ページに残った。

ゴミムシの先生だった笠原さん、ありがとうございました。ご冥福をお祈りします。

(岡山県岡山市)

出相い

興水 太三

見当すら付けられないゴミムシ類の中で、右往左往している私を見かねて、「ゴミムシと遊ぶには、笠原君を避けて通れまいよ！」と、カメムシの長谷川仁先生が気使って下さり、笠原さんがゴミムシの御師匠さんになって下さった。笠原さんのお名前や、お仕事は私なりに存じ上げていたものの、一面識もない私には、大きな喜びと、少なからぬ緊張感とが渦巻いていた。程なく、自宅に來訪下さり初対面となった。以来私には、ゴミムシと長髯・その中から覗く温和な眼差し・レベル調整してのお話などが、一丸となって、机上でも、野外でも、ゴミムシと共にあるようになった。

都度の酒席は、コップ一杯のビールで仕上がるゲコの私に合わせ、「もう充分！」と切り上げるのが常で、これを真に受けていた。ある時、奥様から「大酒は控える様取り計らいたい」旨のご連絡を受けたことがあった。この時ようやくと大酒を召される事を知り長期間、勸進帳に勝る大芝居を觀せられていた様な気がした。

八ヶ岳山麓の田舎料理は、畑作物以外何もない。しかし來訪される度に「うまい！うまい！」を連発されて召し上げられた。時には村民に、このうまい野菜を村おこしに奨励する様話されたこともあった。また村立「奥村土牛記念美術館」を觀た折、「絵書きは、完成作品を觀るもよいが、より以上に完成過程のデッサンを觀たいものである。」と、その道を説かれた。翌春ウドをお届けしたら、折返しウドのみごとな色紙絵が送られて來、「おいしかった、うまかった」とそえられていた。

笠原さんは、短期治療で、時折入院されていた様であったが、その都度お便りをいただいていた。その中で、「今度はパーキンソンだそうだってさ！今度は長引くので音信が遠のくので悪しからず。」との電話が元気な笑聲で届いた。私は唾然としつつ懸命に声を整えながら、「病氣は選択できない厄介者だが、來たからにはこれも出相い、上手につき合って早く退散願いましょう。」と、つくり笑聲でお返事した。これが最後の入院前日の会話で、他界されたのも知らぬままのお別れとなってしまった。

「死んだとて、どこへもいかぬ、ここにいる。尋ねはするな、返事はせぬぞ」(一休禪師) 合掌

(長野県南佐久郡)

熊のような“笠原さん”

堀 繁久

茨城昆虫研究会会誌の“るりぼし”の茨城県の歩行虫の表紙には、石を起こしながら吸虫管を咥えホッペを膨らませてものすごい形相で地面にいる全ての昆虫を吸いとっているヒゲ面の怪しい風貌の御仁が描かれている。どうも、その人物が自分と非常に似た雰囲気に描かれていて、何故か他人のヨウナ気のしない、その熊みみたいな人物が笠原さんであった。

北海道のゴミムシを中心に多くの種を親切に同定していただいたのは、昨日のことように思えてくる。今思えば、蛾屋から甲虫屋に転向して最初にまとめて同定依頼をしたのが笠原さんであった。オオキンナガゴミムシの再検討をしたいということで何百頭も綿の上でダンスを踊っているような状態のタトウの肥しになりつつあった標本を嫌がられるのではとドキドキしながら送ったのも懐かしい。今手元の標本箱には、Det. S. Kasahara と書かれた大きな肌色の同定ラベルが付いたエゾゴモクムシ、ウエノツヤヒラタゴミムシなどのゴミムシが並んでいる。これら標本を見ると笠原さんの穏やかな顔が浮かんでくる。また、氏の書かれる精密な昆虫画は見る者の視線を捕らえて放さない。特に黒光りのするナガゴミの図のファンは自分だけではないはずである。あのナガゴミの図が見られなくなったのは淋しい限りである。あの絵を見てナガゴミにハマッタ虫屋もきつというはずである。

最後に笠原さんに会ったのは何年前の学会会場

「ヒゲの時代」

西川 正明

豪雨の中、はぐれてしまった笠原さんを探した。丹沢山の堂平の一段目付近のことであった。地滑りで形成された階段状の地形なので、私は、一段目、二段目、三段目と勝手に呼んでいる。少し、青くなりかけたが、ほどなくゴミムシ類を得るためのトラップを掛け終えた笠原さんと合流できた。その夜は、塩水橋からのびる林道の最終地点で野営し、みごとに晴れた翌日は、堂平での採集を満喫したのだった。この丹沢山で二度、山梨県境の山伏峠で一度、富士山で二度、採集行をともした。これらは、もう15年程も前のことである。サングラスにキスリング、下駄履きという出立ちで、私を驚かせた、あの笠原さんはもういない。

テントの中では、安ウイスキーを飲みながら、虫界談義を楽しんだ。なにせ話題が豊富で、飽きさせず、逆に人から話題を引き出すのも上手かった。分類的「楽しみ方」を教わったのも笠原さんからである。そんなテントの虫談義であったか、清風荘での



であったとおもう。ヒゲも白くなっていて、杖をついていた。でも、優しい熊みみたいな雰囲気は以前のそのままだった。それから、しばらく連絡が途絶えていたがかなり体調が悪いらしいという話しと…昨年、鞘翅学会での上野先生から伺った逝去の知らせとなった。年末に氏の墓前に捧げる賀状を送ることとなった。本当にお世話になった。心より御冥福をお祈りもうしあげる。

(北海道開拓記念館)

ことであったか、奄美大島のベッコウヒラタシデムシのことを話すと、ちゃんと覚えていて、後日、当時健在であった黒澤先生を通して科博の標本をみる機会が与えられた。逡巡する私を励まして、論文を出す機会を作ってくれたのも笠原さんであった。一方、ご自身のナガゴミムシ研究では、本学会の『Elytra』を毎号飾った、笠原さん一流の全形図を伴った論文を始めとして、『北九州の昆虫』に何度か出された採集記も、実に採集意欲をそられる内容で、私もいつしかナガゴミムシの魅力にも取り付かれてしまう程であった。

神奈川の談話会にもよく出席していただいた。桜木町駅にあった「一力」での三次会でも、虫談義にふけたことが思い出される。当時はまだ3,000種をめざしていた頃であったが、ゴミムシの分布や記録種数から、一定地域の甲虫の潜在的な生息種数を推定する経験則を披露してみんなを唖らせた。すなわち、1/3説(本州には約1,000種のゴミムシが記録されているが、県レベルではその1/3の約300種、県内のある地域ではまたその1/3の100種がいて、例えば校庭の中などにはまた1/3の30種がいる。もっと狭い家の庭などになると10種という

具合に、ゴミムシの種数は1/3ずつ減る)と1割説(ある地域で記録されるゴミムシの種数は、その地域で記録される全甲虫の種数の約1割を占める)である。私たちは、これらを含めた笠原さん一流の言明を「笠原語録」と名付けた。

私は、「ヒゲのない時代」の笠原さんのことはほと

んど知らない。「ヒゲのない時代」は画道で、「ヒゲのない時代」が虫道なのだと思います。貴兄からの影響は、決して少なくなかった。心からご冥福を祈りたい。

(神奈川県海老名市)

酒の友、虫の友、笠原須磨生氏

蕭 嘉 廣

笠原氏と親しく話をするようになったのは、当会の92年5月の静岡接阻峡での採集会からである。当日私は故黒沢良彦先生、中村俊彦氏ならびに友人の伊藤勇君と4名で私の車で出かけ、その時、笠原氏はその採集会の幹事をしてられました。

それ以前から笠原氏の名前と顔は存じていましたが、親しく話をする機会が有りませんでした。その日の夕食時、笠原氏はコップを片手にニコニコして私に話かけて来ました。どこから聞きつけたのか、我が家で年2回やっている虫屋の飲み会に自分も参加させてほしいとのことでした。その年の秋の上海蟹をつまみの飲み会から毎回欠かさず参加してくれるようになりました。

それと平行して92年から始まった神奈川県の丹沢環境調査で氏は私と同じ鞘翅班の班長をしており、私の採集したゴミムシの同定をお願いします

た。

96年に松洞丸でヤツオオナガゴミムシを採集(その後01年加入道山でも採集)した時は、同定後すぐに電話をいただいたのを覚えています。オサムシの記載があるからと95年の木曾御岳の調査書をいただいたのもこの頃でした。それを境に徐々に体調をくずして、採集にも行かれなくなったようでした。我が家での飲み会に奥様の秀子さんも一緒に参加してくれるようになり、酒はドクターストップがかかっているのに興が乗ってくると、「久保田」をひやで一杯などと請求してなかなか酒と縁がきれいな生活のようでした。

それに最後に氏の声を聞いたのは01年2月末、故黒沢先生の葬儀をひかえて、出席できるようなら船橋まで車でむかえに行くと言電話をすると、体調が悪く、ちょっとむり。皆様によろしくとのことでした。そして9月に天国に旅立って行かれました。きっと天国でも酒と虫の日々を送っていることでしょう。

(神奈川県横浜市)

笠原画伯の思い出

境野 広 行

一画伯一私は昆虫仲間との話の中で、笠原氏が登場する時には、尊敬の念をこめていつもこう呼ばせていただいた。そのお人柄と業績に加えて、一度見ると忘れられない風貌からも、それに相応しい方だったと思っている。

画伯と最初に親しくお話しをしたのは、およそ25年前、私が東京農大の学生の頃で、確か昆虫書籍販売のTTSの店頭ではなかったかと思う(当時は大学からも近い経堂駅前のビルの一室で、学生にとって研究者の方々と顔見知りになれる貴重な場所だった)。その頃は、トレードマークのりっぱな髭はまだ伸ばされておらず、街中を歩く時も、いつも登山靴のようながっしりした靴を愛用されており、さすがゴミムシ屋さん、いつでも採集に行けるようにしているのか、と本当は違うのかも知れないがその時は妙に納得し感心したのを覚えている。その後間もなく、甲虫ニュースの編集会議が農大の研究室で行われるようになり、編集委員を引き受けられた画伯は度々足を運ばれ、我々にとっても有意義で楽しい時間を過ごさせていただいた。恐らく画伯自身も、毎回楽しみにされていたのではないだろうか。

画伯との一番の思い出は、甲虫ニュース62号

(1983)の表紙を飾ったコウトウチビクワガタの図を描いていただいたことである。筆の遅い私は、ただ標本を眺めているだけでなかなか纏められずにいたところ、ちょうど来室されていた画伯が「それじゃ図は自分が描いてあげるから」とさっさと標本を持って帰られてしまった。それから何と次の週には、図が描き上がったのでどこかで会って渡したいとの連絡をいただき、喜び勇んで受け取りに出掛けした。聞けば他に抱えている仕事をすべて後回しにして、異例の速さで仕上げていただいたという。画伯の甲虫ニュースへの思い入れと、後輩研究者に対する温情を知ることとなり、感激で胸がいっぱいになった。さて、図を受け取ってそれを見た私は、今度は驚愕してしまった。前述のように図に関してはすっかり任せきりだったのだが、手にした図には、私が重要な特徴として明記しておかなければと考えていた部位が、拙い文章を補って余りある程に、ことごとく鮮やかに表現されており、もちろん誇張されていることも無く、正に我が意を得たりの心境で、暫くプロの仕事の凄さに見とれてしまった。その日、待ち合わせ場所にした日本橋たいめい軒の生ビールと洋食の味は忘れられないものとなり、原画はかけがえのない宝物になった。

全形図が必要なクワガタムシ科の小型種を、再び研究する機会があったら、是非また画伯に描いていただこうとずっと心に秘めていたが、もはやそれは

永遠に叶わぬ夢になってしまった。お互いの研究対象以外のことで心置きなく、何でも気軽に話せる人はそう多いものではない。こんなにも早くそのお

一人を失ってしまい誠に残念で寂しい限りだが、画伯のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(鎌倉女学院)

スピルバーグの映画と笠原さんの長電話

松本俊信

笠原さんとの思い出と言えば、お酒を呑みながらひたすら虫の話で、23歳という年齢差にもかかわらず気さくに楽しくお相手して下さったことです。氏は文芸等にも造詣の深い才人でいらしたはずで、いま思うと少し残念なような気もしますが、当時虫一色の生活をしていた私には、笠原さんとは虫の話だけで十分だったようです。

初めてお会いしたのは20年以上前になります。氏が農大の岡島博士とともに甲虫ニュースの編集世話人になられたことから、同じゴミムシ屋ということで、シャイな私でも自然とお話しをさせて頂くようになりました。当時としては珍しいゴミムシ屋であり農大の昆虫所所属ということからでしょうか、年若な私にも敬意を払って下さいました。2,3編共著で記載や報文を書いて下さったのは、私には良い記念です。

最後にお会いしたのは、神奈川県内で開催された鞘翅学会の会場でした。おもに、小笠原の new の

Badister と *Colpodes* についてでしたが、後者は私に献名すると言って下さいました。また、懇親会では、すでに体調を崩しておられたことから、お酒を控えるように注意したのですが、ビールを呑みながらの諫言だったので、苦笑いしながら怒られたのを思い出します。

ここ10年ほど私も仕事がより忙しくなり、また元気がない氏の顔を見るのが嫌さに、私と話がしたい旨のことを人づてに聞いてはいたのですが、結局お会いしないうままでした。昨年当たり覚悟をしてはいたのですが、あらためて亡くなったとの知らせを聞き、さすがに強い喪失感を受けました。それは、日本の甲虫界の損失でというよりも、個人的な感情の方でより感じております。

ご冥福をお祈りいたします。

そういえば一時期、笠原さんから私のアパートに電話が来るときは、決まってテレビでスピルバーグの映画を見ているときでした。何度目かには、またか、と笑っておられましたが、当然映画の方は何がなんだかわからなくなっていました。最後の方は狙ってかけてらしたのかもしれませんが(笑)。

(神奈川県横浜市)

最後の手紙

大谷規夫

笠原さんから届いた手紙はあつという間に6年がたってしまった。その間、電話での話は数多いが、良き友として実に残念に思う。亡くなる昨年の3月に彼と逢った時はまだ歩いておられ、まだまだ一緒に採集旅行に行ける日があると願っていたが、その夢もなくなった。そのときすでに感じておられ、その日は亡きあとの話のみで、小生には励まず言葉しかなかった。

暇のままならないゴミムシ情報など本当にありがとう。

いろいろ話題や課題は残ってしまったが、ここに良き友の最後の手紙を載せておきたい。

大谷規夫 様

拝復

御手紙有難う、今年ももう残り少なです。貴兄のご家族そろって元気に新年を迎えられることを心から祈っています。

先日ゴミムシ屋の友人から電話があり貴兄のことをきかれたので、親友だが大谷のオッサンは怒りっぽくて結構こわいぞと云っておいたフフ……

さて、今年は小生なにかと不調で病院通いをしましたが、だいぶ回復したので来年は頑張ります、また援助して下さい。とはいっても、採集は八ヶ岳、木曾、南アルプス、四国の小田深山へ行き、千葉県動物誌、神奈川県丹沢大山の調査報告をまとめたので、まんざら病人で過ごしたわけではありません。

先日は9年振りにやっとの四国のナガゴミ原稿を仕上げました、お楽しみに。また千葉県の房総半島で、なんと *Niale* 亜属のナガゴミが採れました。標高 80 m ほどで海岸からわずか 7 km の丘陵地です。これも急拠図を描いて目下原稿を書いています。

四国のは♂♀ 5 exs. しかありませんが、千葉のは 19 exs. あり、現地へ行く積り。記載に環境写真を入れたいので。そのうちわけてあげます。

[中略]

それから例の *Zuphium* 今全形図を描いています。また共著でも書きましょう。一応 *Zuphium modestum* S.-Göbel と同定、原記載のコピーも入手しました。上野先生は日本初記録の属、族だから英文で書けと云ってます。

[中略]

最近あまり身辺に沢山のゴミを溜めこむのがしんどくなった。四国のナガゴミや中国四川省の未整理のゴミが 3,000 頭以上あります。これもわけてあげます。

いろいろごちゃごちゃ書きましたが来年もよろしく。

また貴兄の家の庭で酒盛りをしたいね。
では皆様よろしく

敬具

1996・12・27

笠原須磨生
(広島県広島市)

笠原さんが遺されたもの

野村周平

笠原須磨生さんが昨年9月亡くなったことは、私にとっても大きな悲しみだった。まだ私が九大にいた頃、今はなき彦山生物学実験所を訪ねて見えた笠原さんとお会いしたのが初めての出会いだったと思う。科博に移ってきた時、関東に知己の少ない私を親しく迎え入れていただいたご恩は、何にもまして忘れられない。

その笠原さんが遺された標本を、奥様のご希望で科博に収蔵させていただけるとのことで、4月26日、上野俊一先生の指揮の下、西船橋のご自宅へ引き取りに行った。科博非常勤の渡辺芳美さんと、新井志保、松本浩一、松本慶一、豊田浩二、島田孝、鶴智之の諸君にお手伝いを頂いた。

笠原さんの標本は2階の6畳の部屋に置いてあった。中型のドイツ箱とインロー箱が合計約200個。これらの標本箱に入ったものは一部を除いて分類順によく整理されていた。大半がゴミムシで、特に研究されていたナガゴミムシの標本はそれぞれがきちんと整形され、黒光りして実に見事だ。ゴミムシ以外の甲虫もかなりこまめに集められていた。

問題は研究中、もしくは整理中だったとおぼしき、マウントされてない標本群であった。それらの一部は脱脂綿の上に並べられ、ラベルが添えられたままの状態、標本箱や紙箱、タッパーの中におさめられていた。それだけではなく、解剖され、摘出された雄交尾器が本体のそばに添えられていた標本も相当な量に上った。これらは衝撃を与えると動いて、どれがどれの交尾器であるのかわからなくなる恐れがあるので、細心の注意を払って運搬された。午前中から作業を始め、科博の標本室におさめ終えたときには午後10時を回っていた。

部屋の一番奥からは、20箱ほどの蝶の標本が出てきた。笠原さんは昆虫を始めた当初、蝶がお好きで収集されていたという。私には、その蝶の標本に、笠原さんの、昆虫にとりつかれた頃の「初心」が込められているような気がしてならなかった。

コレクションには、それを収集した人のさまざまな思いがにじみでるものだ。笠原コレクションは今後、さらに整備を必要とするが、科博の重要なコレクションの一つとして大切に保管していきたい。笠原さんと志を同じくする人は誰でも、科博に収蔵されている笠原コレクションを見たり、研究に利用できるようにしたいと考えている。

(国立科学博物館)



1972年6月19日、湯の花にて。



1985年11月16～17日、山中湖にて。

1950年(中学3年)「4匹の蟲の会」を結成して以来、友情は続いているという。笠原さんの愛称は「河童さん」。写真は同会のメンバーのお一人向井良成氏提供。

アリサンウスバコメツキの記録

鈴木 互

アリサンウスバコメツキ *Taiwanathous arisanus* Miwa, 1930 は、台湾中部の阿里山で採集された標本に基づいて Miwa (1930) によって新属新種として命名記載されたものである。その後、Miwa (1931) の目録や Miwa (1934) のモノグラフで引用・再記載されたが、追加標本は得られないままにあった。最近、KISHII (1997) は阿里山に近い Funchifo [奮起湖] で採集された 1 雄個体を検し、その全形図と交尾器の写真を明らかにしたが、その他の形態的特徴については触れていない。筆者は、三輪勇四郎博士が採集された標本を台湾省農業試験所で検することができたので、ここに簡単にその形態的特徴を記載しておきたい。

本文を草するにあたり、基準標本を含む貴重な標本を検査する機会を与えて下さった、台湾省農業試験所の L. CHOU 博士に厚くお礼申し上げる。

Genus *Taiwanathous* Miwa

アリサンウスバコメツキ属

Taiwanathous Miwa, 1930: 68. Type species: *Taiwanathous arisanus* Miwa, 1930: 68 (Mt. Arisan) [in Athoinae].—Miwa, 1934: 30 [in key], 34, 226.—SUZUKI, 1999: 113–114 [in Athonia, Dendrometrini].

頭部は深く凹み、前縁は前方へ伸び、先端は切断状。触角は著しく長く、前胸後角を明らかに越える。第 3 節は長三角形で、4 節から垂糸状。前胸は幅が狭い。前胸背板は中央で明らかに幅より長く、両側は狭く縁取られる。前胸後角は隆起線を欠く (図 3)。小楯板は垂直に近く、前縁は不明瞭。上翅は細長い、前胸より幅広い。附節は細長く、1 節は 2・3 節を合わせたものより明らかに長い (図 6–8)。2 節は単純、3 節末端は弱く広がり、4 節は最小で、下方へ短く葉片状にのびる。雄交尾器側片先端外縁には明瞭な側突起をもつ (図 4–5)。

本属は、体色、頭部前縁や小楯板の特徴がチャイロツヤハダコメツキ属 *Scutellathous* の一部の種に似るが、著しく長い触角、附節の形状、雄交尾器の形状の違いにより、容易に区別することができる。

Taiwanathous arisanus Miwa, 1930

アリサンウスバコメツキ (Figs. 1–9)

Taiwanathous arisanus Miwa, 1930: 68 (Mt. Arisan).—Miwa, 1931 a: 94.—Miwa, 1931 b: 141 (Arisan).—Miwa, 1934: 226 (Arisan) [redescription].—JIANG, 1993: 144 (Taiwan).—KISHII, 1997: 11, fig. 4 a, b (Funchifo).—SUZUKI, 1999: 114 [lectotype designation].

検視標本。台湾省出営, 16. V. 1935, Y. Miwa leg. (台湾省農業試験所所蔵)

分布。台湾 (中部山岳地域)。

形態。体長 10.5 mm; 幅 2.7 mm。体は細長く、平行状。黄褐色で、頭部、前胸背板、小楯板はわずかに暗色を呈する。背面は淡黄色の微毛でおおわれる。頭部は頭幅 (複眼を除く) の 1.16 倍の長さ。複眼に沿った側縁は浅く湾入する。点刻は深く、明瞭。その間隔は点刻の直径に等しい。点刻間の表面は滑らかで光沢を放つ。触角第 3 節は長く、2 節の 2.53 倍で 4 節の 0.76 倍。第 5 節先端で前胸後角先端を越す。11 節は細長く、10 節の 1.18 倍。前胸は狭く、前角後および後角前で弱く波曲、後角は後方外側へ突出し、先端は尖る。前胸背板は強く膨隆するが、中央線に沿って短くて浅い溝を備え、側縁部は平圧される。点刻は深く明瞭、点刻間は点刻直径とほぼ同じか幅広い。表面は滑らかで光沢を放つ。前胸腹板突起は細長く、上方へ折れる。上翅は細長く、並行状で基幅の約 3.5 倍。背面は膨隆するが、上面は平圧される。条線は不明瞭だが、大型で深い点刻列

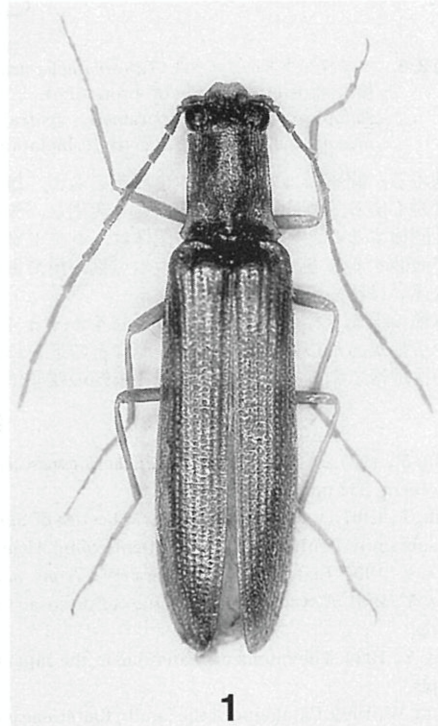


図 1. タイワンウスバコメツキ *Taiwanathous arisanus* Miwa.

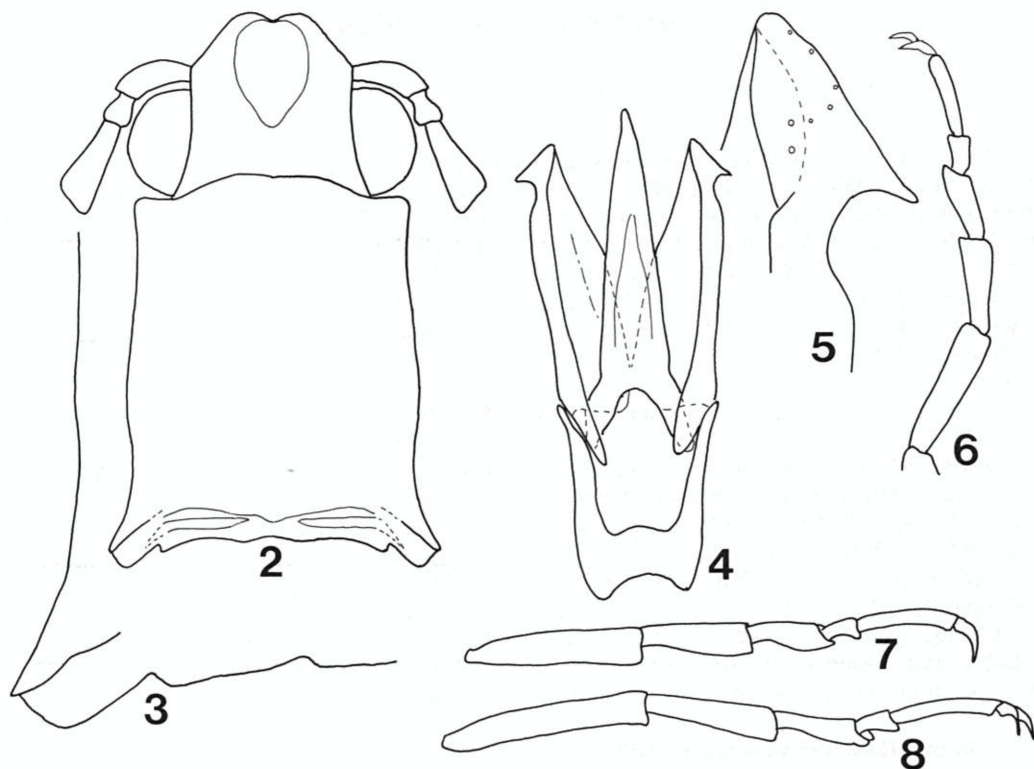


図2-8. タイワンウスバコメツキ *Taiwanathous arisanus* Miwa. 2, 頭部と前胸背板(head and pronotum); 3, 前胸後角 (posterior angle of pronotum); 4, 雄交尾器腹面 (male genitalia, ventral view); 5, 側片先端部腹面 (apical portion of paramere, ventral view); 6, 右前脚附節 (right protarsus); 7, 右中附節 (right mesotarsus); 8, 右後脚附節 (right metatarsus).

を備える。間室にはまばらに微小点刻をもつ。雄交尾器は1.13 mmで、基幅の3.78倍。中央片は細長く、先端は鋭く尖る。側片の外縁突起は強く突出し、先端は鋭く尖る。

今回検することのできたこの個体は、レクトタイプ標本と比べ体色がより明るいこと、前胸両側は後角が手前で波曲すること、そして小楯板の点刻が粗であることなどの点で違いが認められたが、その他の形質での大きな違いは認められなかった。

本種の採集された3個体の採集月日を見ると4月28日、5月16日、5月27日となっており、発生時期にはやや幅があることがわかる。標高などの違いにより発生時期には差が出るだろうが、この時期に合わせて中部山岳地帯で調査を試みれば、現在未知の雌個体も得られる可能性は高まるだろう。

参考文献

- KISHII, T., 1987. *A taxonomic study of the Japanese Elateridae (Coleoptera), with the keys to the subfamilies, tribes and genera.* 262 pp, 12 pls. Kyoto.
- KISHII, T., 1997. A study on the elaterid beetles of SHIBATA collection from Taiwan, V. (Coleoptera: Elateridae). On the subfamily Denticollinae: tribus Denticollini, Hemicrepidini and Dimini. *Ent. Rev. Japan, Osaka*, 52: 9-14.
- MIWA, Y., 1930. Elateridae of Formosa (IV). *Trans. nat. Hist. Soc. Formosa*, 20: 57-68, 1 fig.
- MIWA, Y., 1931. A systematic catalogue of Formosan Coleoptera. *Rep. Dep. Agric. Gov. res. Inst. Formosa*, (55): xi+ii+359 pp.
- MIWA, Y., 1934. The fauna of Elateridae in the Japanese Empire. *Rep. Dep. Agric. Gov. res. Inst. Formosa*, (65): 1-289, 9 pls.
- SUZUKI, W., 1999. Catalogue of the family Elateridae (Coleoptera) of Taiwan. *Misc. Rept. Hiwa Mus. nat. Hist.*, (38): 1-348. (東京都世田谷区)

コキノコムシ科甲虫の分布記録

木元 達之助

コキノコムシ科 Mycetophagidae に含まれる甲虫は、一部貯穀食品より見出される種を除いて、成虫、幼虫ともに食菌性と考えられている。採集方法は、菌類から見出されるほか、枯れ枝や立枯れから採集される場合もある¹⁾。これは、枯死木の上部や樹皮下など採集者に見えない部分に菌類が生じているためと思われる。日本からは7属28種が知られているが、採集記録はきわめて少ないので、下記に手元にある標本のデータを報告する。コキノコムシ科の同定は、宮武(1985)に従った。菌類については、今関他(1988)を参考にした。

1. ウスオビコキノコムシ *Pseudotriphyllus lewisianus* (WOLLASTON) (写真1)
3頭, 大分県九重町黒岳, 8~9. X. 1994, 上野輝久採集; 福島県いわき市四時川林道 (木元, 1998).
2. フタオビコキノコムシ *Triphyllioides seriatus* (REITTER) (写真2)
茨城県北茨城市定波 (木元, 1996a); 2頭, 群馬県富士見村赤城山八丁峠付近, 14. VII. 2001, 筆者採集.
3. コモンヒメコキノコムシ *Litargus japonicus* REITTER (写真3)
1頭, 滋賀県彦根市笹尾, 6~9. VIII. 1993, 遠藤千秋採集; 1頭, 愛知県丹原町白坂, 2~5. V. 1997, 遠藤千秋採集; 1頭, 和歌山県広川町上津木, 16. V. 1997, 遠藤千秋採集; 3頭, 愛知県丹原町白坂, 9~12. VIII. 1997, 遠藤千秋採集; 1頭, 福島県いわき市小玉川沿い, 14. VI. 1997, 筆者採集.
4. ムツモンヒメコキノコムシ *Litargus sexsignatus* MIYATAKE (写真4)
1頭, 鹿児島県奄美大島宇検村赤土山, 2. VII. 1996, 遠藤千秋採集.
5. ウスモンヒメコキノコムシ *Litargus lewisi* REITTER (写真5)
2頭, 沖縄県石垣島元名蔵, 17. IV. 1998, 遠藤千秋採集.
6. キュウシュウヒメコキノコムシ *Litargus kyushuensis* MIYATAKE (写真6)
千葉県君津市郷台畑 (木元, 1997); 山梨県韭崎市御座石鉱泉; 福島県巖谷村鱒沢; 栃木県日光市男体山志津林道; 福島県いわき市四時川林道 (以上木元, 1999); 1頭, 茨城県北茨城市定波, 7. VIII. 1999, 筆者採集. 筆者が1999年に本州初記録として発表したが、それ以前に福井県で採集されていた。この場を借りて訂正するとともにお詫申し上げる.
7. マダラヒメコキノコムシ *Litargus maculosus* REITTER (写真7)
1頭, 山梨県須玉町増富金山沢, 27. VII. 1995, 筆者採集; 2頭, 栃木県栗山村川俣, 2. VIII. 1996, 筆者採集; 1頭, 福島県松枝岐村舟岐林道, 23. V. 1998, 筆者採集; 1頭, 静岡県天城湯ヶ島町旧天城峠, 22. VII. 2000, 筆者採集.
山地性と思われる。上記記録は、ほとんどがライトトラップによる採集例である.
8. ヒゲブトコキノコムシ *Mycetophagus antennatus* (REITTER) (写真8)
1頭, 群馬県水上町高平山, 28. VI. 1993, 筆者採集; 1頭, 茨城県金砂郷町西金砂山, 26. VI. 1994, 筆者採集; 2頭, 茨城県桂村御前山, 10. IX. 1994, 筆者採集.
丘陵帯から山地帯まで分布する.
9. クロコキノコムシ *Mycetophagus ater* (REITTER) (写真14)
1頭, 山梨県鳴沢村大室山付近, 15. VIII. 1992, 筆者採集; 2頭, 茨城県桂村御前山, 14. V. 1994, 筆者採集; 1頭, 福島県大熊町大川原林道, 8. VI. 1999, 筆者採集; 1頭, 群馬県水上町奥利根水源の森, 17. VII. 1999, 筆者採集; 1頭, 宮城県蔵王町宮城蔵王澄川沿い, 8. VII. 2001, 筆者採集.
丘陵帯から山地帯上部まで生息する.
10. コマダラコキノコムシ *Mycetophagus pustulosus* (REITTER) (写真10, 11)
1頭, 茨城県北茨城市定波, 13. VIII. 1994, 筆者採集; 3頭, 栃木県栗山村川俣, 2. VIII. 1996, 筆者採集; 3頭, 奈良県奈良市春日山, 21. VI. 1998, 秋田勝己採集; 3頭, 群馬県水上町奥利根水源の森, 17. VII. 1999, 筆者採集; 2頭, 静岡県本川根町蕎麦粒山, 4. VIII. 2001, 筆者採集; (以下, 斑紋消失型 var. *funebri* REITTER) 1頭, 北海道紋別郡生田原町, 16. VII. 1985, 亀澤 洋採集; 1頭, 北海道滝川町江別乙, 22. VII. 1996, 渡辺英行採集; 3頭, 山形県朝日村月山中台池, 26. VII. 2000, 筆者採集.
山地帯に多い.
11. ナミモンコキノコムシ *Mycetophagus undulatus* (REITTER) (写真9)
2頭, 福島県南会津郡岩村湯の花, 11. VI. 1994, 筆者採集; 3頭, 北海道札幌市八剣山, 28. VI. 1996, 渡

¹⁾ 本科甲虫の食性に関する情報が不足していることから、上野(1992)は、採集記録を報告する際に学名を伴った菌名を記述する必要があると主張している。海外では花粉、カイガラムシ科昆虫、シダ植物などとの関連が報告されているとのことである。

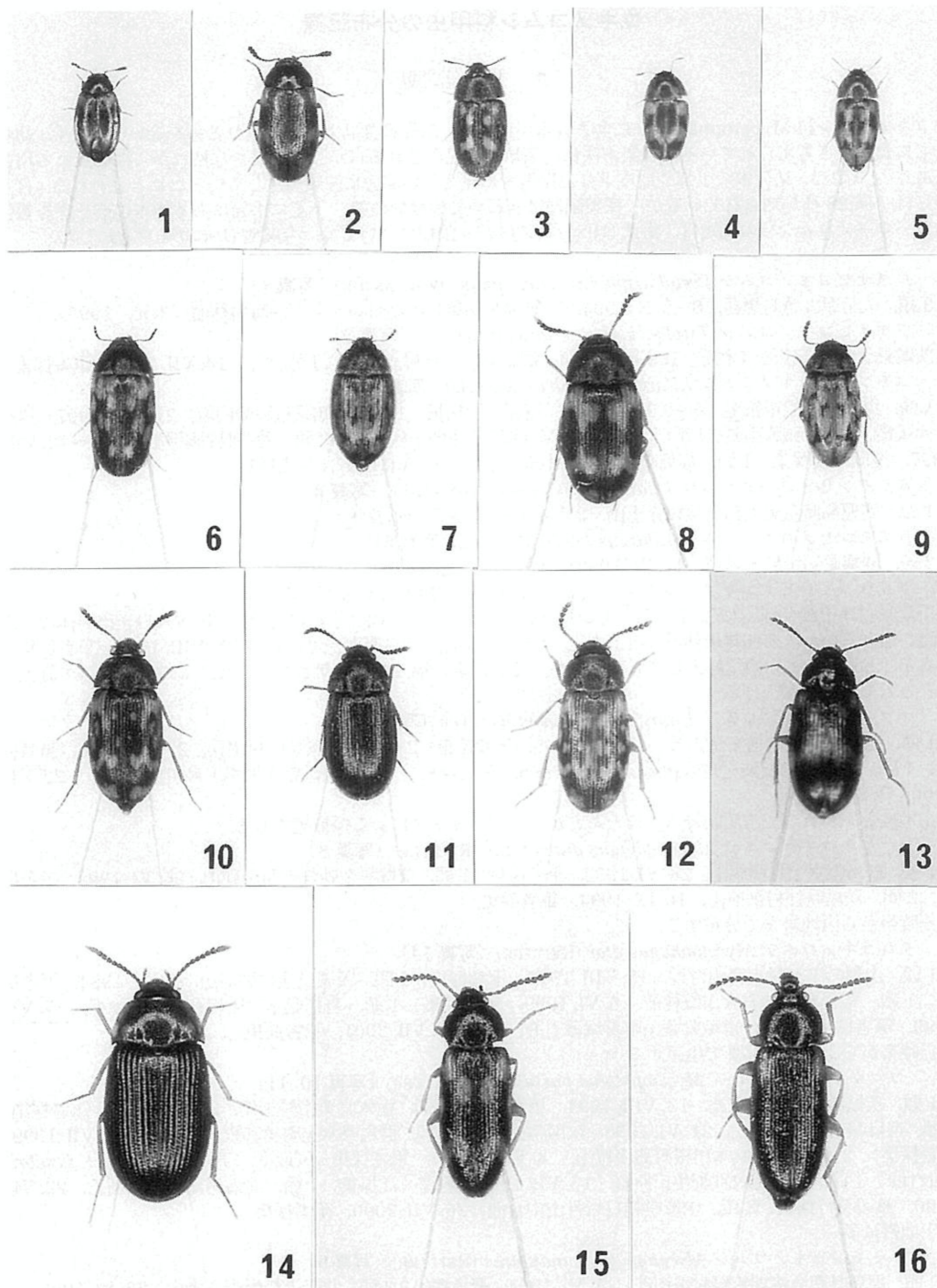


図1-16. 1: ウスオビコキノコムシ, 2: フタオビコキノコムシ, 3: コモンヒメコキノコムシ, 4: ムツモンヒメコキノコムシ, 5: ウスモンヒメコキノコムシ, 6: キュウシュウヒメコキノコムシ, 7: マダラヒメコキノコムシ, 8: ヒゲブトコキノコムシ, 9: ナミモンコキノコムシ, 10-11: コマダラコキノコムシ, 12: ヒレルコキノコムシ, 13: アンボツコキノコムシ, 14: クロコキノコムシ, 15-16: ホソガタコキノコムシ.

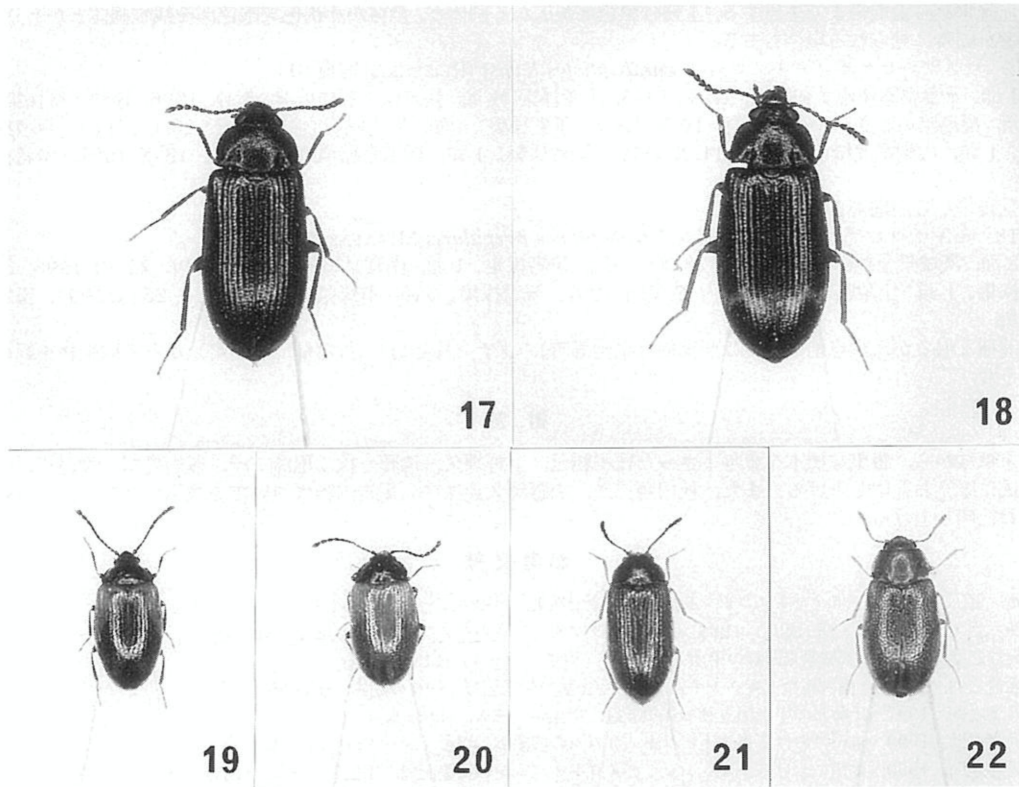


図 17-22. 17-18: オオコキノコムシ, 19-20: アカバヒゲボソコキノコムシ, 21: ウスグロヒゲボソコキノコムシ, 22: チャイロヒゲボソコキノコムシ.

辺英行採集; 2頭, 栃木県栗山村湯西川前沢, 8. V. 1999, 筆者採集; 3頭, 茨城県北茨城市定波, 7. VII. 1999, 筆者採集; 10頭, 福島県矢祭町八溝山茗荷川上部, 26. V. 2001, 筆者採集.

山地性と思われる.

12. オオコキノコムシ *Mycetophagus grandis* (REITTER) (写真 17, 18)

1頭, 静岡県本川根町山犬段, 4. VIII. 2001, 筆者採集; (以下, 斑紋消失型 var. *simplex* (REITTER)) 1頭, 群馬県片品村武尊山, 31. VII. 1993, 筆者採集; 2頭, 山梨県須玉町増富本谷川, 5. VIII. 1995, 筆者採集; 1頭, 福島県矢祭町八溝山茗荷川上部, 24. IX. 2001, 筆者採集.

ブナ原生林などに生息するが少ない. 筆者は, 全て広葉樹大木の立枯れから採集した.

13. ホソガタコキノコムシ *Mycetophagus elongatus* (REITTER) (写真 15, 16)

8頭, 栃木県栗山村田代山林道, 16. VII. 1994, 筆者採集.

稀な種で, 筆者は林内のブナ倒木の樹皮下から採集した. 上翅の黄色紋に変異があり, 5対, 1対, 無紋の個体が見られる.

14. ヒレルコキノコムシ *Mycetophagus hillerianus* REITTER (写真 12)

1頭, 茨城県北茨城市定波, 30. VII. 1995, 筆者採集.

15. アシボソコキノコムシ *Mycetophagus obsoletesignatus* MIYATAKE (写真 13)

1頭, 長野県川上村金峰山西股沢, 24. VII. 1995, 筆者採集; 2頭, 山梨県須玉町八丁平, 2. VIII. 1997, 筆者採集.

Holotype はハヶ岳 (宮武, 1968) で採集されており, 南アルプス (芳賀, 1994) から記録がある. 川上村では, マツノタバコウロコタケ *Hymenochaete yasudai* IMAZ. とと思われる菌類から採集した.

16. アカバヒゲボソコキノコムシ *Parabaptistes reitteri* (LEWIS) (写真 19, 20)

1頭, 高知県物部村三峰山, 3. XI. 1995, 豊嶋亮司採集; 茨城県桂村御前山 (木元, 1996a); 千葉県君津市元清澄山 (木元, 1996b); 2頭, 福島県いわき市入遠野, 10. V. 1997, 筆者採集; 1頭, 三重県美杉村平倉, 21. V. 2000, 秋田勝己採集.

丘陵帯から山地帯まで生息する。上翅に黒色部が広がる個体と、全体が赤褐色で暗色部を残す個体とがあり、両者が同時に見られる場合もある。

17. ウスグロヒゲボソコキノコムシ *Parabaptistes lewisi* (REITTER) (写真21)

1頭, 千葉県君津市黄和田畑, 28. X. 1995, 筆者採集; 1頭, 長野県安曇村沢渡, 6. IX. 1996, 遠藤千秋採集; 2頭, 福島県いわき市小玉川沿い, 10. V. 1997, 筆者採集; 4頭, 群馬県新治村大般若, 20. IX. 1997, 筆者採集; 1頭, 山梨県韮崎市御座石, 11. X. 1997, 筆者採集; 1頭, 栃木県那須町大川林道, 18. X. 1997, 筆者採集。

丘陵帯から山地帯まで生息する。

18. チャイロヒゲボソコキノコムシ *Parabaptistes irregularis* MIYATAKE (写真22)

3頭, 茨城県金砂郷町西金砂山, 23. XI. 1993, 筆者採集; 1頭, 山梨県須玉町増富本谷川, 25. VI. 1995, 筆者採集; 1頭, 山梨県須玉町八丁平, 2. VIII. 1997, 筆者採集; 3頭, 群馬県片品村武尊山, 25. X. 1997, 筆者採集。

前種と似るが、生息地としては照葉樹(金砂郷町), ブナ(片品村), 針葉樹(須玉町)などの原生林を好むようだ。

謝 辞

末筆ながら、貴重な標本を恵与下さった秋田勝己、上野輝久、遠藤千秋、亀澤 洋、豊嶋亮司、渡辺英行の各氏に厚くお礼申し上げる。また、秋田勝己氏、上野輝久氏には、報告内容についてご教示いただいた、重ねてお礼申し上げる。

参 考 文 献

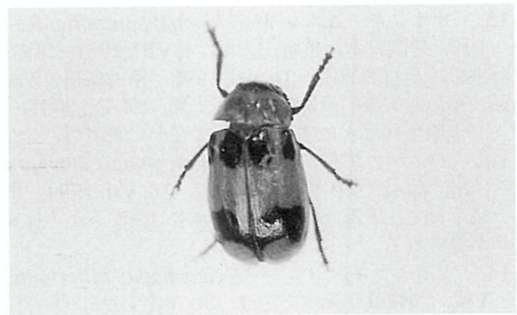
- 芳賀 馨, 1994. アシボソコキノコムシを南ア広河原で採集. 甲虫ニュース, (105): 6.
 今関六也・前川二郎・横山和正, 1988. ヒダナシタケ類. 日本のキノコ, 490, 山と溪谷社, 東京.
 木元達之助, 1996a. 茨城県未記録の甲虫8科21種. 甲虫ニュース, (113): 8.
 木元達之助, 1996b. 南房総のナガクチキムシ科等甲虫類の採集記録. 房総の昆虫, (16): 26.
 木元達之助, 1997. 千葉県の甲虫類5種の採集記録. 甲虫ニュース, (118): 8.
 木元達之助, 1998. 本州におけるウスオビコキノコムシの採集例. 甲虫ニュース, (121): 15.
 木元達之助, 1999. 本州におけるキュウシュウヒメコキノコムシの採集記録. 甲虫ニュース, (125): 8.
 宮武睦夫, 1968. 日本産コキノコムシ科の2新種. 昆虫学評論, 20(1/2): 31-32.
 宮武睦夫, 1985. コキノコムシ科. 原色日本甲虫図鑑(III), 285-288, 保育社, 大阪.
 上野輝久, 1992. コキノコムシ科の食性と系統. 昆虫と自然, 27(13): 21-25. (株)ニューサイエンス社, 東京.
 (東京都足立区)

○石垣島にてヨツボシアカツツハムシを採集

ヨツボシアカツツハムシ *Coptocephala orientalis* BALY は、木元(1984)および木元・滝沢(1994)によると、本州、四国、九州、朝鮮半島、モンゴルに分布するとされるが、珍しい種で、文献から渉獵できる採集記録は僅かではない。筆者は、2001年5月23日にこれまで記録がないと思われる石垣島において1個体を採集しているので、報告する。

本種の寄主植物としては、カワラヨモギが知られているが、叩き網採集によって得られたため、どの植物についていたかを見定めることはできなかった。なお、初島(1971)によると、石垣島にもカワラヨモギは分布し、さらに同属のヨモギ属(*Artemisia*)の種として、ヨモギ、ニイタカヨモギ、オトコヨモギが分布する。

文末ではあるが、東洋大学の大野正男教授には本種の分布について、愛知教育大学の芹沢俊介教授には石垣島のヨモギ属についてご教示いただいた。お礼申し上げます。



引 用 文 献

- 木元新作, 1984. ハムシ科. 林 匡夫他(編)原色日本甲虫図鑑, 4, p. 147-223. 保育社, 大阪.
 木元新作・滝沢春夫, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫検索図説, xvii+539 pp. 東海大学出版会, 東京.
 初島住彦, 1971. 琉球植物誌.
 (愛知県小牧市, 穂積俊文)

モモコブアリヅカムシの採集例とその生息場所

新井 志 保

モモコブアリヅカムシ *Physomerinus pedator* は SHARP によって新潟産の標本をもとに 1883 年に記載され、その後 NOMURA (1991) により九州 (熊本, 長崎, 佐賀), ならびに屋久島の標本をもとに再記載された。本種は一見何の変哲もないアリヅカムシのようであるが、オスの後脚腿節が強く膨らみ、その膨らみの間からキノコ型の突起が出ている奇妙な形態をした種である (図 1)。

筆者はこれまで報告例の少ない本種の既知産地の紹介と新たな産地を記録し、若干の知見とともに報告する。

〔既知産地〕新潟県新潟市 (基準産地) (野村・小池, 1994), 熊本県天草下島下田, 長崎県中通島今里, 佐賀県伊万里市二里町, 鹿児島県屋久島栗尾 (NOMURA, 1991), 佐賀県江北町六角川河口 (西田, 1998), 埼玉県川越市平塚新田 (越辺川) (新井, 2001)。

〔新産地〕2♂, 千葉県木更津市畔戸 (小櫃川), 6. IX. 1993, 吉田 進採集; 3♂7♀, 同所, 27. VI. 1994, 吉田 進採集; 2♂4♀, 同所, 24. X. 1994, 岸本年郎採集; 1♀, 同所, 25. X. 1998, 豊田浩二採集; 2♂4♀, 東京都大田区多摩川河口, 13. V. 2001, 野村周平採集; 1♂3♀, 神奈川県川崎市多摩川河口, 9. IV. 2000, 荻部治紀採集; 24♂34♀, 同所, 21. IX. 2000, 豊田浩二採集; 11♂17♀, 同所, 14. V. 2001, 高桑正敏・豊田浩二・松本慶一採集; 15♂5♀, 徳島県徳島市津田, 11-18. IX. 1965, 酒井雅博採集; 2♂, 宮崎県延岡市大貫町, 21. III. 1997, 木野田 毅採集。

これらの記録をまとめた本種の分布は下記の図 2 のようになる。

本種の生息環境は分布図からも分かるように、ほとんどのものが沿岸部で得られている。これは野村 (1996) にもあるように、本種が河川の河口付近にあるススキやオギの生えている環境から得られているためである。しかし新井 (2001) で記録されているのは荒川の支流の一つである越辺川の中流で、オギの生えた湿地脇の芝生より採集されている (図 3)。

これらの情報をまとめると、本種の生息環境は河川の河口部とは限らず、水辺のススキ・オギの生えている草地であると考えられる。また、NOMURA



図 2. モモコブアリヅカムシの産地。

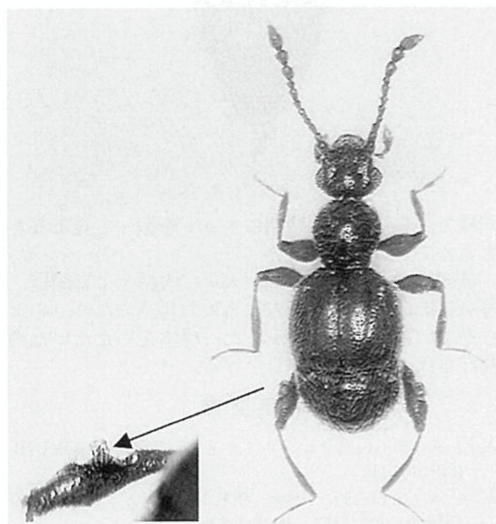


図 1. 神奈川県産モモコブアリヅカムシ♂と拡大した後脚腿節。



図 3. 埼玉県川越市平塚新田 (越辺川) の生息環境。

(1991)で産地の一つにあげられている伊万里市では、河川改修工事によって生息環境が失われてしまったとのことである(野村, 1996)。このように河川やその河口部では工事の手が入ることによって生息環境が失われやすい。今後本種の採集はますます困難になると予想されることを付記しておく。

末筆ながら、日頃からお世話になり、本種の採集データの公表を快諾下さった国立科学博物館の野村周平博士、神奈川県立生命の星・地球博物館の高桑正敏博士、同博物館の苅部治紀氏、東京農業大学昆虫資源学研究室の岸本年郎博士、埼玉県嵐山町の豊田浩二氏、東京都立高尾自然科学博物館の松本慶一氏、東京都町田市の吉田進氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 新井志保, 2001. 埼玉県のアリヅカムシ相. 埼玉県立自然史博物館研究報告(19): 1-14.
 西田光康, 1998. 佐賀県西部の河口付近で得られた甲虫. 佐賀県の昆虫, (32): 71-78.
 NOMURA, S., 1991. Systematic study on the genus *Batrisoptisus* and its allied new species from Japan (Coleoptera, Pselaphidae). *Esakia, Fukuoka*, (30): 1-462.
 野村周平, 1996. 佐賀県のアリヅカムシ. 佐賀県の生物: 263-279.
 野村周平・小池 寛, 1994. 新潟県産アリヅカムシ分布資料. 越佐昆虫同好会特別報告, (2): 123-137.

(東京農業大学)

○愛媛県におけるオオクロナガコメツキの記録

オオクロナガコメツキ *Elater niponensis* (LEWIS, 1894) は、北海道、本州、四国、九州、屋久島の森林に広く分布することが知られている種である。大型のコメツキムシであるが、いずれの地域においても採集される機会は少ない。四国における本種の記録は、最近までなかったが、大平(1998: 44)は高知県手箱山から、黒田(1998: 22)は徳島県木沢村奥槍戸から発見し、少ないながらも四国に生息していることが明らかにされた。筆者は愛媛県で採集された個体を所持しているのここに記録しておきたい。

1♂, Kanayamadani, Omogo, Ehime Pref., 21. VII. 2001, Y. WADA leg.

末尾ながら、標本の入手に際しお世話になった葛信彦氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 黒田祐次, 1998. 四国におけるオオナガコメツキとその近縁種について. 徳島昆虫, (10): 21-22.
 大平仁夫, 1998. 日本産オオクロナガコメツキ属とヒメクロナガコメツキ属について. 比和科学博物館研究報告書, (36): 43-47, 3 pls.

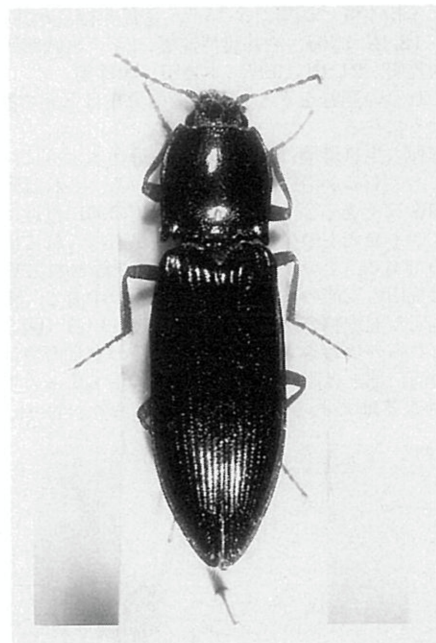
(東京都世田谷区, 鈴木 互)

○ツヤヒラタコメツキの東限の記録

ツヤヒラタコメツキ *Aganohypoganus mirabilis* (MIWA, 1934) は1属1種の特異なコメツキムシである。分布も愛知県、岐阜県、三重県、和歌山県と太平洋側の低山地に沿って点々と見られる。今までの東限は愛知県三河地方の本宮山麓であるという。筆者は東限を大幅に更新する標本を持っているので、ここに記録しておきたい。

1♂, 静岡県熱海市姫沢, 8. IV. 2000., K. WATANABE 採集.

熱海市姫沢は熱海梅園の近くで、神奈川県とは目と鼻の先である。大平(2001)によれば、本種の出現期は桜の開花期と一致するという。得られた標本も



同様で、来年はこの時期にネットを振って見ようかと考えている。

最後になってしまっが、大平仁夫博士には同定、写真撮影、文献など一方ならぬお世話になり、心より深謝の意を表したい。また、標本をいただいた酒井洋平氏に厚く御礼申し上げます。

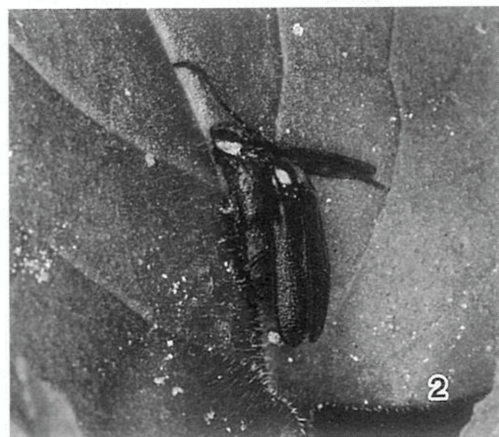
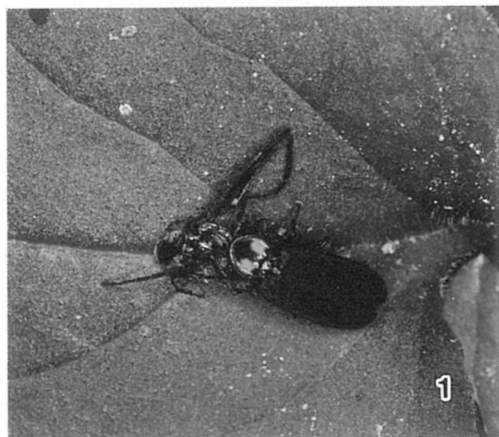
引用文献

- 大平仁夫, 2001. ツヤヒラタコメツキのなぞ. KINOKUNI, (60): 11-12.
 大平仁夫・平松広吉, 1998. 和歌山県産コメツキムシ類の記録(6). 南紀生物, 40(2): 162-164.

(神奈川県小田原市, 平野幸彦)

○古い雌の死体に交尾行動をとったオバボタルの雄
 オバボタル *Lucidina biplagiata* MOTSCHULSKY は日本国内ではかなり普遍的に分布しており、いわば普通にみられる種であるが、その配偶行動についてはそれほど研究が進んでいるわけではない。筆者は折りに触れて本種についても野外での調査を試みてきた。結論からいえば具体的な成果が挙げているとはいえないが、その途上で興味を引く現象を観察することができたので、断片的な知見ながらここに記録しておきたいと思う。

調査地は神奈川県三浦郡葉山町の桜山大山林道(二子山山系、森戸川流域)で、日時は1997年6月5日である。林道沿いの下草に注意し、本種を含めたホタル科の探索に努めていたところ、運良く交尾しているとみられる本種を発見することができた。まず写真撮影を開始したが、どうも下になっている雌個体の様子がおかしいので肉眼で再確認したところ、雌個体はすでに死亡した状態であった(写真1, 2)。死亡後かなりの時間を経過しているらしく、雄個体を除去して詳細に調べてみると、上翅はめくれ上がり附属肢も部分的に欠落しており、葉上にしっ



かりと固着している状態にあった。死亡後どれ位の日数を経っていたのかは不明ながら、雄を誘引するだけの匂い物質は十分残存していたものと想像できる。マウントしていた雄個体は、発見から少なくとも15分間以上は死亡していた雌の背面上に静止したままで、時々腹部先端を曲げて交尾器の挿入を試みていた。

これまでに今回の件と類似した報告は大場(1980)およびOHBA(1983)における対馬のアキマドボタル *Pyrocoelia rufa* E. OLIVIER のものがある。両者は同一の実験を記録しているが、前者について述べると、死亡後数十日目の乾燥した雌個体に対しても交尾行動が解発されたことと記録されている。ただし添付された写真のキャプションでは「十数日」とあり、後者では同じ写真を示した上で「dead for 10 days」とのキャプションが付されており、いったいいずれが正確な日数なのかは残念ながら判断としない。ともかくホタル科において雌の性的匂い物質を介して配偶にいたる種では、これら以外の各種においても、その物質は死亡後も少なくとも10日かそれ以上は残存し、雄個体を誘引するだけの効果を保つ可能性があるという推定もなされる。今後もそのような、ケミカル・コミュニケーションを伴う配偶行動をとる各種において、様々な面からのデータの蓄積や検証が必要であるといえる。

引用文献

- 大場信義, 1980. 対馬のアキマドボタル. 横須賀市博物館報, (26): 15-19.
 OHBA, N., 1983. Studies on the communication system of Japanese fireflies. *Sci. Rept. Yokosuka City Museum*, (30): 1-62, pls. 1-6.

(神奈川県横須賀市, 川島逸郎)

○西表島におけるメダカハネカクシ2種の採集記録

筆者らは、八重山諸島西表島において、日本からこれまで記録のなかったメダカハネカクシ及び記録が非常に少なかった同属のハネカクシをそれぞれ1種ずつ採集したのでここで報告する。

1. *Stenus (Hypostenus) spurius* L. BENICK (写真左) [日本新記録]

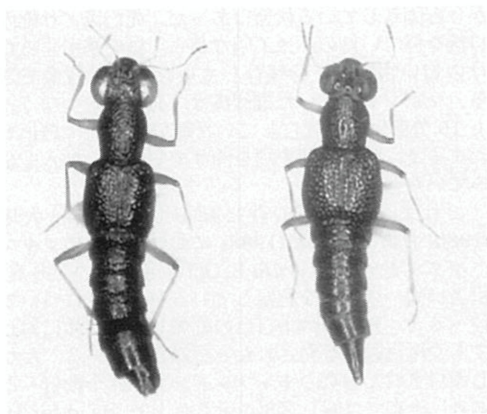
本種はこれまでフィリピンと台湾だけから記録されていたものである。日本からは今回初めて記録された。

3 exs., 西表島大富西仲間林道, 31.III.2001, 江本健一採集; 22 exs., 同所, 31.XII.2001, 渡辺秀行氏採集。

採集した環境はいずれの場合も草の生えた湿地で、草の根際をゆすって水面に浮いた個体を採集した。

2. *Stenus (Stenus) piliferus* MOTSCHULSKY (写真右)

本種は東南アジアやオーストラリアに広く分



布する種である。日本からは NAOMI (1997) により西表島から初めて記録されたが、その後確かな記録はないようである。

1 ex., 西表島古見, 24.II.2001, 渡辺崇採集;
1 ex., 同島大富西仲間林道, 31.III.2001, 江本健一採集。

採集した環境は渡辺の場合は川岸の落葉下、江本の場合は前種を採集したのと同じである。渡辺秀行氏は前種を多数採集されたにもかかわらず、本種は全く得られなかった。

末筆ながら、同定の労をとられ、発表を勧めて下さった直海俊一郎氏(千葉市)、及び貴重な採集品を筆者らに委ねられ、発表をお許しいただいた渡辺秀行氏(新座市)に厚くお礼申し上げる。

参考文献

NAOMI, S., 1997. Four new species of the genus *Stenus* (Coleoptera, Staphylinidae), with redescription of two interesting species from Japan. *Jpn. J. Ent.*, 65 (4): 745-759.

HERMAN, L., 2001. Catalog of the Staphylinidae (Insecta: Coleoptera). 1758 to the end of the second millennium. IV. staphylinine group (Part 1). *Bull. Am. Mus. Nat. Hist.*, (265): 1807-2439.

(神奈川県藤沢市, 渡辺 崇)
(東京都豊島区, 江本健一)

○ナガハナノミダマシ科甲虫の分布記録

ナガハナノミダマシ科 (Artematopidae) 甲虫の採集例を報告する。本科は日本に1属4種を産するが、いずれも生態が不明であるためか採集例が少い。筆者は、いずれも沢沿いのライトトラップで採集した。同定は酒井(1985)に従った。

1. ヒサマツナガハナノミダマシ

Eurypogon hisamatsui SAKAI (写真1)

1頭, 徳島県木頭村細川内, 7~9.V.1997, 遠藤千秋採集。

山梨県鳴沢村(水野, 2001)にも記録がある。

2. ハバビロナガハナノミダマシ

Eurypogon brevipennis SAKAI (写真2)

2頭, 静岡県天城湯ヶ島町天城峠, 21.VI.1997, 筆者採集。

体型が幅広いことから区別は容易である。栃木県日光市(大桃他, 1997), 青森県十和田湖町(尾崎, 1998), 奈良県伯母子岳(水野, 2001)からも記録がある。

3. ホソナガハナノミダマシ

Eurypogon ocularis SAKAI (写真3)

1頭, 茨城県大子町月居山, 28.V.1995, 進藤琢也採集; 2頭, 静岡県天城湯ヶ島町天城峠, 21.VI.1997, 筆者採集。

酒井(1985)によれば、次種との区別点は複眼の大きさと前胸背板の点刻密度であるが、点刻密度にはかなり個体差があるように思われる。よってオス個体を対象として、複眼が前胸背板前縁より側方にはみ出たものを本種とみなした。メスと思われる個体も所蔵しているが、同定方法がわからないので、報告から除外した。

4. ニホンナガハナノミダマシ

Eurypogon japonicus SAKAI (写真4)

1頭, 宮城県宮崎町旭~寒風沢, 25~28.V.1994, 遠藤千秋採集; 1頭, 山梨県須玉町増富金山沢, 27.VII.1995, 筆者採集; 2頭, 長野県大鹿村白沢, 28.V.1997, 遠藤千秋採集。

本科のものとしては個体数の多い種である。栃木県黒磯町(大桃他, 1995), 青森県平賀町(尾崎, 1998), 福島県下郷町(斎藤他, 1999), 埼玉県奥秩父(水野, 2001)にも記録がある。

末筆ながら、貴重な標本を恵んでくださった遠藤千

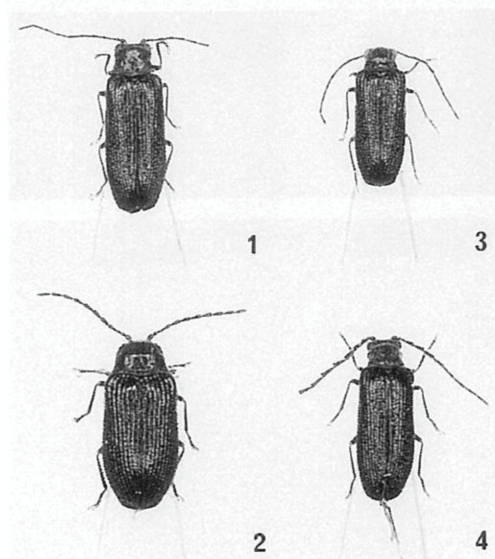


図1-4. 1: ヒサマツナガハナノミダマシ, 2: ハバビロナガハナノミダマシ, 3: ホソナガハナノミダマシ, 4: ニホンナガハナノミダマシ。

秋氏, 故進藤琢也氏にお礼申し上げます。

引用文献

水野弘造, 2001. 水野弘造自力採集甲虫目録(1951-2001). 水野弘造の20世紀甲虫誌: 83. 関西甲虫談話会, 京都.

大桃定洋・佐藤光一, 1995. 栃木県産甲虫分布資料(4). インセクト, 46(1): 16.

大桃定洋・佐藤光一, 1997. 栃木県産甲虫分布資料(6). インセクト, 48(1): 27.

尾崎俊寛, 1998. 青森県の甲虫類(2). *Celastrina*, (34): 18.

酒井雅博, 1985. ナガハナノミダマシ科. 原色日本甲虫図鑑(II), 420.

斎藤修司・芳賀 薫・平野幸彦・水野谷昭三・鈴木智史, 1999. 1999年福島虫の会調査報告(南会津郡下郷町). ふくしまの虫, (18): 15.

(東京都足立区, 木元達之助)

○久米島で採集した興味深いゾウムシ類

今年(2002年)の3月27日から30日まで, 沖縄県の久米島へゾウムシ採集に訪れた。期間中は雨が多く思うように採集が出来なかったが, 久米島未記録と思われる以下の種が採集できたので報告する。

Sitona cylindricollis (FAHRAEUS) ナガチビコフキゾウムシ (写真1)

3exs., 久米島大和泊海岸, 30. III. 2002.

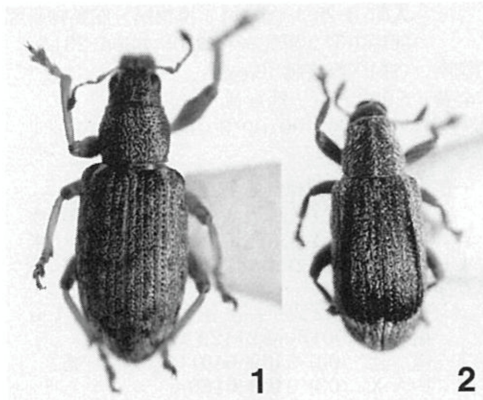
海浜に生えていたマメ科草本のスイーピングにより採集した。本種は沖永良部島と沖縄本島で記録されている。

Imachra maetai (MORIMOTO) ナガクチプトノミゾウムシ (写真2)

3exs., 久米島だるま山園地, 30. III. 2002.

残念ながら, 採集した樹種を特定できなかった。本種は稀な種で, 鹿児島県と沖縄本島での記録しかない。

Shigizo rhombiformis MORIMOTO ヒシガタシギゾウムシ (写真3)



ナガチビコフキゾウ

ナガクチプトノミゾウ

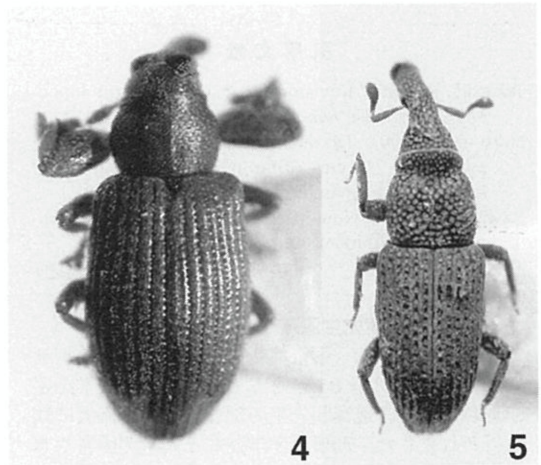
1ex., 久米島だるま山園地, 30. III. 2002.

ガジュマルのピーティグで採集した。本種は奄美大島から石垣・西表島まで分布しているが, 久米島の記録はない。

Ochyromera ryukyuensis KOJIMA et MORIMOTO リュウキュウアシプトゾウムシ (写真4)



ヒシガタシギゾウ



リュウキュウアシプトゾウ

オキナワキクイサビゾウ

1ex., 久米島だるま山園地, 30. III. 2002.

ヒサカキのピーティグで採集した。本種も奄美大島から石垣・西表島まで分布しているが, 久米島の記録はない。

Stenommatius ocularis (KONISHI) オキナワキクイサビゾウムシ (写真5)

1ex., 久米島青少年旅行村, 27. III. 2002.

リュウキュウマツの倒木樹皮下で採集した。本種は, 宮崎県, トカラ中之島, 奄美大島, 沖縄本島で記録されている。

(和歌山県有田郡, 的場 績)

○石川県白峰村におけるサワダナガアリヅカムシの分布記録

筆者は原記載以降記録のないアリヅカムシを石川県から採集しているので、報告しておく。採集方法はリターをシフターで篩った後、ツルグレン装置を使った。

サワダナガアリヅカムシ *Euplectus* (s. str.) *sawadaianus* NOMURA は SAWADA (1956) がムカシアリヅカムシ族の新属新種として記載した *Phthartomerus nanus* を NOMURA (2001) の分類学的整理により提唱された新名である。

本種は現在までのところ、SAWADA (1956) における原記載標本産地である大阪府からのみ記録されており、本報告において2例目の記録となる(野村, 私信)。

1♂, 石川県白峰村六万山, 2. IX. 1996, 筆者採集, 野村保管。

採集地点は加賀白山山系のブナ帯であり、林床のリターから採集した。

末筆ながら、本種の同定をいただき、常日頃からご指導を賜っている国立科学博物館の野村周平博士に謝意を表す。

引用文献

- JEANNEL, R., 1958. Revision des Pselaphides du Japon. *Mem. Mus. Hist. nat., Paris*, (A), 18: 1-138.
- NOMURA, S., 2001. Taxonomical review and list of the pselaphine species (Staphylinidae, Pselaphinae) known from Japan. *Elytra, Tokyo*, 29: 141-161.
- SAWADA, K., 1956. Noue pselaphinen von Japan (Coleoptera, Pselaphidae). *Akitsu, Kyoto*, 5: 101-103.

(石川県金沢市, 中田勝之)

◇渡邊泰明先生退職記念祝賀会の報告◇

去る4月20日、東京都新宿区の京王プラザホテルにて、本年3月31日をもって東京農業大学を定年退職された渡邊泰明先生の記念祝賀会が盛大に執り行われました。理事長・学長など大学関係者や本学会役員をはじめとする多数の会員、著明な昆虫学者、総勢180名が会場にかけつけ、先生と同じくハネカクシの研究をされている岸本年郎さんの司会で、終始にぎやかな雰囲気の中で進められました。途中、記念品や花束の贈呈、また、祝辞や思い出話が入れ代わり立ち代わり披露され、普段聞くことのできないエピソードは大変興味深いものでした。

祝賀会の終了後、参加者には渡邊先生ご自身が執筆なさった『風花雪月～虫屋半世紀の轍～』が配布されました。これには渡邊先生の中学生・高校生時代の話、ハネカクシの研究をなさるようになったきっかけ、日本各地や中国の採集記、そして特にゆかりの深かった人々との出会いについて等が書かれています。また、申込者に配布された記念論文集“NABESANIA”は、ハネカクシの論文だけで100



渡邊先生ご夫妻、大学関係者とともに鏡開きを終え、乾杯の音頭をとる高桑正敏副会長。(妹尾俊男氏撮影)

ページを超えるというあたりが、他の研究者の論文集にはない、渡邊先生の記念号らしさがでているといえるでしょう。なおこの表装の色は渡邊先生が長年コレクションなさっている「河童」をイメージして選ばれたとのこと(国立科学博物館の上野俊一、野村周平両博士談)。

渡邊先生は大学の諸行事、また多数の学生を抱えて、ご自身の研究に割ける時間もたいへん限られていたと思います。今後は同じキャンパス内にある「農の博物館」に移られ、これまでに集められた標本の整理、ご研究の継続をなさるとのことです。渡邊先生のますますのご健勝と研究のご発展・ご活躍をお祈り申し上げます。

(東京農業大学大学院, 新井志保)

甲虫ニュース 第138号

発行日 2002年6月28日

発行者 大林延夫

編集者 妹尾俊男(編集長)、長谷川道明、川島逸郎、奥島雄一、鈴木 互、吉富博之

発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館動物研究部昆虫第2研究室 ☎ 03-3364-2311

印刷所 (株)国際文献印刷社

年会費 6,000円(一般会員)

郵便振替口座番号 00180-3-401793

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社